



# はじめに

これまで繰り返し記してきたところですが、本学は“市民の大学”“地域のための大学”“世界とともに歩む大学”という基本理念を掲げて2016年4月に開学しました。

この基本理念に基づいて本学が教育研究の場できりわけ力を込めて試みているのが「地域協働型実践教育」です。1～4回生全員がそれぞれに選択したテーマにしたがって担当の教員とともに地域を訪問し、住民の方々に話を聞き、共に地域の課題について考え、その解決の方向性について検討するという授業です。

本報告書は、2019年度のこの授業の概要をまとめたものです。

最初の報告集だった2016年度のものに比べると、かなり内容も豊かになり、学生たちの学びの内容も「学生の気づき」欄で少しずつ深く書けるようになってきているようです。また、正規の授業だけでなく学生たちの自主的な学びのプロジェクトや他大学との交流も昨年同様に報告されていますが、新しく掲載されたのは最後の方の「卒業研究」の「研究概要一覧」です。これはこの3月に集立っていく開学時の入学生たちがどんな卒業研究に取り組んだかを記したものです。しかし、残念ながらこの欄にはまだごく一部の卒業研究の題目とほんの数行の概要が記述されているだけです。開学時の入学生たちのカリキュラムでは卒業研究が必修科目ではなかったことも関係しています。現在の3回生以下のカリキュラムでは必修科目に指定されています。来年度以降はこの欄が充実し、やがては卒業研究そのものを中心にした報告書を別に出せる時が来るのではないかと私はひそかに期待している次第です。

さらに来年度は情報学部の教員や学生たちを迎えます。

二つの学部を持つ大学になり、“地域に根ざしながらも、世界に開かれた学びの拠点”という目標に向かって一層充実した成果報告書を出せるよう全学が一体となって努力する所存です。

末尾になりましたが、この授業の受け入れ先となってお力添えくださいました地域の方々に篤くお礼申し上げますとともに、地域の方々をはじめご関心をお寄せくださる方々からの厳しいご批判と温かい励ましが頂戴できれば嬉しい限りです。

福知山公立大学 学長 井口 和起



# 目次

はじめに	1
<b>第1部 福知山公立大学における地域協働型実践教育</b>	
1 学長×1年生ゼミ代表 座談会	3
2 主な訪問先一覧	5
<b>第2部 各ゼミの取り組み報告</b>	
1 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ(1回生)	7
2 地域経営演習Ⅲ、Ⅳ(2回生)	14
3 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(3回生)	17
4 キャリア設計Ⅰ・Ⅱ(4回生)	53
5 卒業研究Ⅰ・Ⅱ(4回生) 研究概要一覧	56
<b>第3部 地域協働型実践教育成果報告会</b>	59
<b>第4部 学生プロジェクト</b>	61
<b>第5部 「地域キャリア実習」プログラムについて</b>	
1 地域キャリア実習 実習紹介	68
2 診療情報管理実習概要紹介	71
<b>第6部 他大学との交流事業</b>	73



# 振り返りと、これからのについて。

## 学長×1年生ゼミ代表 座談会

# 福公大での1年間の

本学に入学し、1年生たちはどのような学びに取り組んできたのか。  
またその経験を踏まえ、次年度以降どのようなことにチャレンジしたいのか、  
井口学長と1年生ゼミ代表5名との座談会を行いました。

### 1年間の学びを振り返って

**井口学長** この1年間、本学で学んでみてどんなことが印象に残っていますか？

**田中** ゼミでは大江町毛原に入り、農福連携をテーマに耕作放棄地の有効活用について考えました。荒れた土地にヨモギを植え、その農作業を障がい者の方に依頼することで、障がい者の方の賃金を増やすとともに、荒地の軽減につなげられないかといったことについて議論を深めました。

**秋山** 私のゼミでは福知山の正地区をフィールドに、地域活性化について取り組みました。大正公民館祭の企画・運営にも関わり、地域の方々と深く交流できたのが印象に残っています。

**三宅** JR福知山駅コンコース内の空きスペースの有効活用について考えるというテーマに取り組みました。所有するJR西日本さんが非営利の場合、同スペースを1週間無料で開放されており、その制度を利用して今年(2019年)度福知山駅前で開催した福桔祭(大学祭)の子ども休憩スペースとして活用。お子さんをはじめ、ご家族の方からも大変好評でした。

**杉本** 由良川の河川整備によるハード面と、住民の方の気持ちというソフト面の両面について調べました。歴史を調べていく中で、「暴れ川」として恐れられていた由良川が、近年では

堤防ウォーキングやカヌー教室など、住民の楽しみの場としても機能していることがわかり、興味深かったです。あとは住民間の共助の体制が整っているのも印象的でした。

**難波** 夜久野町のデジタルアーカイブ化活動の一環として、ウィキペディア(※インターネットの百科事典)の記事作成に取り組みました。まだウィキペディアに掲載されていない、夜久野町ならではのものを取り上げようと夜久野そばに着目。生産者である「やくの農業振興団」会長さんなどにインタビューを行いました。

### 学んだ内容を地域に還元する

**井口学長** みなさん、1年次から興味深い研究をなさっていますね。三宅さんの空きスペースの有効活用は、福桔祭が終わった後は何か提言されたんですか？

**三宅** クラス内で有効活用案を480個だし、それらをまとめたものを年度末の報告会でJR西日本さんに提案しました。

**井口学長** 杉本君が大江町は防災に対して共助ができていている話をされましたが、それが上手く機能しない時もある。情報は共有されていますが、避難のスピードに個人差があるという問題が課題となっています。

**杉本** 防災教育のさらなる徹底も必要だと思います。大江町では2017年、18年に内水被害が出た地域を中心に、その対策として排水ポンプや調節池、排水路などの最適化についても取り組んでいます。

**井口学長** 今後、大学で防災研究センターを設立する予定です。みなさんの研究活動をさらに深めることができるでしょうし、その成果を地域のみなさんにも還元できればと考えています。

### 高校の時の学びとの違いについて

**田中** 普通科の高校で、基本的に地域との関わりはありませんでした。ですので、地域の方と接する機会は圧倒的に増えましたね。直接お話を伺うと、印象として頭に残りやすくなるので、フィールドワークは学習方法としても優れていると感じました。

**秋山** 高校2年生の時に、「地域探究」という地域の課題について考える実習型の授業がありました。その時、課題をいただいたのは市役所の方が中心でしたが、大学のフィールドワークでは子どもからお年寄りの方まで、圧倒的に一般の市民の方々と触れ合う機会が多くなり、「身近な意見」に数多く触れられるようになったのが一番の違いです。

**難波** 高校では農業科の生徒が作った農作物を、商業科の生徒が地域の人に販売するという取り組みを行っていました。私は商業科でしたが、出店するスペースや値段など、決定権があるのはすべて先生でした。それが大学では研究のための取材のアポ取りからすべてを自分たちで手がけ、とにかく主体的に動かないと何も進まないというのが大きく違うと感じました。

### これから学び、取り組んでみたいこと

**井口学長** 大学では、何事も「自分でやる」ということが重要ですね。「地域の人の話を聞き、自分で考えて、行動する」ことを実際に体験されたわけですが、2年次以降はどんなことにチャレンジしてみたいですか。

**田中** 大学での学びと並行して、地元宝塚の社会福祉協議会が主催する高齢者向けの食事会のスタッフとしても活動しています。こちらの取り組みにも今まで以上に積極的に参加するとともに、自身の研究とも連動させ、活動を拡充させていきたいです。

**秋山** 1年次で取り組んだ地域のお祭では、自分のやりたいことと地域のニーズが完全にマッチングしたわけではありませんでした。その辺りを意識し、今後もさまざまな活動に取り組んでいければと思います。

**三宅** 私は入学時より地域と防災について考えたいと思っていましたが、ゼミや学生プロジェクトでの活動を通して、移住や環境問題、地域と中小企業との関わりなど、興味の対象が大幅に広がりました。本当にやりたいことを見つけ出すため、今後も多様なことに挑戦するとともに、関心のあった防災についての学びも深めていきたいです。

**杉本** 1年次のグループワークでは上手くいかなかったことも多かったのですが、1年間学んだことを糧にさらに研究活動の内容を充実させていきたいです。また、診療情報管理士の勉強も本格的にスタートするので、そちらの学習にも力を入れていきます。

**難波** ゼミの中ではグループリーダーを担当しましたが、サポートしてくれた仲間が存在が非常に大きかったです。今後はリーダーシップというものをより意識し、みんなを積極的に引っ張っていきたいですね。その中で、自分のやりたいことを探っていければと思います。

**井口学長** 今日お話を聞いて、この1年間でさまざまな体験をし、興味や関心の幅が広がっていることがよくわかりました。その意味では、みなさん2年生になれる資格が十分にあり、頼もしいなと感じました。今後のさらなる活躍を大いに期待しています。



学長  
井口 和起

福知山市出身。専門は日本近代史。本学開学以来、学長を務め、学生や地域活性化のためのさまざまな活動をサポート、実践している。

地域経営学部  
田中 遼平さん

兵庫県立宝塚高校出身。地元宝塚から毎日3時間かけて通学する。通学の電車内では読書にふけり、日本・海外を問わず古典的名作を読み漁る。

地域経営学部  
秋山 勇介さん

鳥取県立鳥取中央育英高校出身。まちかどキャンパス吹風舎を拠点とする学生団体「DOKKO」に所属し、今後さまざまな活動に取り組む予定。

地域経営学部  
三宅 祐花さん

京都府立峰山高校出身。高校時代から課外活動や「京丹後未来ラボ」などの活動取り組みの中で、地域と防災についての学びを深めたいと福公大へ。

地域経営学部  
杉本 優人さん

京都府立宮津高校出身。医療に関する知識を身につけることで、専門職はもちろん、さまざまな仕事で活かせるのではと考え医療福祉経営学科を選んだ。

地域経営学部  
難波 晃司さん

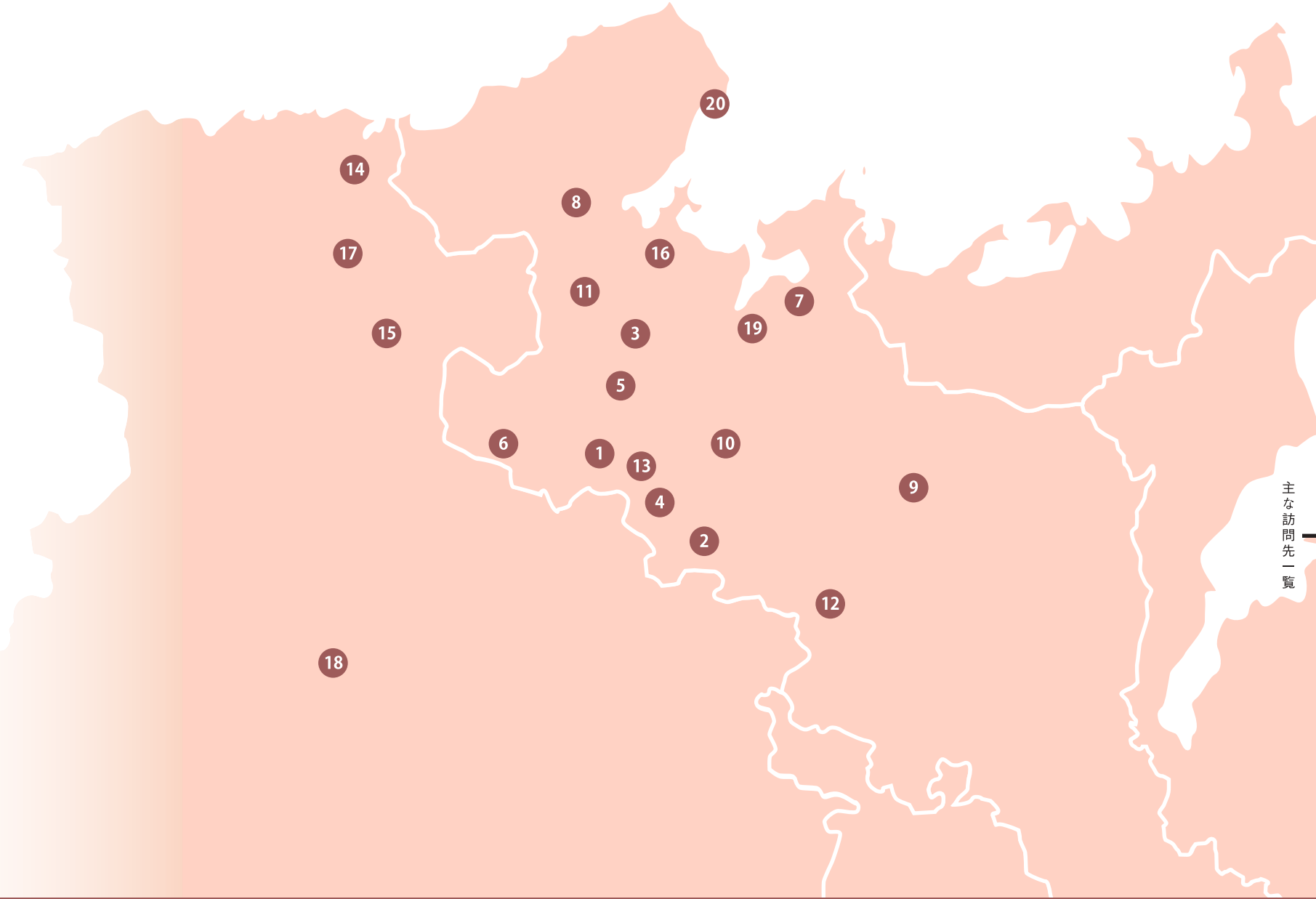
京都府立木津高校出身。現在は福知山で一人暮らしをし、日々の生活の中で地域の人たちと触れ合い、その優しさ、温かさを実感しているという。

地域で学ぶ、知識と実践力。

# THE UNIVERSITY OF FUKUCHIYAMA

# 主な訪問先一覧

頁	取り組み名	訪問場所1 地図番号   自治体名	訪問場所2 地図番号   自治体名
07	由良川屋台船プロジェクトの乗船料設定	① 福知山市(中心市街地)	
07	由良川屋台船プロジェクトの調査	① 福知山市(中心市街地)	
07	由良川屋台船プロジェクトの広報	① 福知山市(中心市街地)	
08	三和ってよくない?—農業の未来を考える—	② 福知山市(三和町)	
08	交流とは?—三和町で学んだ5つのこと—	② 福知山市(三和町)	
08	三和町及び農村地域の公共事業	② 福知山市(三和町)	
09	地域とともに学ぶ防災(グループA)	① 福知山市(中心市街地)	
09	北近畿の農福連携について(Bグループ)	③ 福知山市(大江町毛原)	
10	ラジオ番組の制作・出演によるディレクション・口頭表現の能力向上	① 福知山市(中心市街地)	
10	地域社会への理解を深める協働実践〜大正地区公民まつりを通して	① 福知山市(中心市街地)	
11	魅力的な福知山土産って何だろう?	① 福知山市(中心市街地)	
11	JR西日本福知山駅地域共生スペース活用プロジェクト ぼっぼがかり活動報告	① 福知山市(中心市街地)	
11	六人部PA利用向上に向けた取り組みについて〜売上向上に向けた提案〜	④ 福知山市(六人部)	
12	大江町の買い物動向について	⑤ 福知山市(大江町)	
12	大江と由良川	⑤ 福知山市(大江町)	
12	大江町の観光とモビリティ	⑤ 福知山市(大江町)	
13	夜久野町における地域資源のデジタルアーカイブ	⑥ 福知山市(夜久野町)	
13	夜久野町における地域資源のデジタルアーカイブ化の取り組み	⑥ 福知山市(夜久野町)	
13	夜久野町における観光資源の保存と広報について-Wikipedia Townの取り組みを通して-	⑥ 福知山市(夜久野町)	
14	地域の国際化について考える	⑤ 福知山市(大江町)	⑦ 舞鶴市(東舞鶴)
14	知恵を集めて未来をつくる場「ワークショップ」の理論と実践を学ぶ	① 福知山市(中心市街地)	
15	観光地域づくりの観点から海の京都観光圏を考える	⑧ 京丹後市(大宮町)	
15	すぐれたコンセプトの研究と創造	① 福知山市(中心市街地)	
16	中国語能力のレベルアップとインバウンド観光への実践	⑨ 南丹市(美山町)	
16	京都府北部における農林業及び農福連携の現状について	⑩ 綾部市	⑪ 与謝野町(加悦町)
17	AI技術を用いた観光者行動の分析—福知山市—京丹波町間の観光者行動—	⑫ 京丹波町	
19	外国人労働者のいる社会:より良い共生社会を目指して	⑬ 福知山市(長田野)	
21	文理融合型経営学の学習	⑭ 豊岡市(城崎町)	
23	地域社会の問題解決を試みる地域協働プロジェクトの実践	① 福知山市(中心市街地)	
25	多自然圏の活性化に関する研究	⑩ 綾部市	⑮ 豊岡市(出石町)
27	農業・農村の課題と新しい社会的価値を探る	② 福知山市(三和町)	⑯ 宮津市
29	地方公会計の仕組み、および、財務・非財務情報の定量的・定性的分析手法の理解	③ 福知山市(大江町毛原)	
31	多文化共生のまちづくりとは何かを考える	⑦ 舞鶴市(東舞鶴)	⑧ 京丹後市(大宮町)
33	キャリアパスを意識した能力開発		
35	すぐれたコンセプトの研究と創造	① 福知山市(中心市街地)	
37	1人1リーダープロジェクトから学ぶ臨床政策ゼミ	⑦ 舞鶴市(東舞鶴)	⑰ 豊岡市(中心市街地)
39	京都府内26市町村の市町村産業連関表の作成		
41	高等学校における地域を題材とした探究学習の方法と課題	⑱ 朝来市(生野町)	
43	観光地域づくりを巡る諸問題を考える	⑲ 舞鶴市(西舞鶴)	⑳ 伊根町
45	卒論執筆のための研究手順の把握とテーマの設定		
47	データウェアハウスゼミ(データウェアハウス構築技術の習得と地域分析)		
49	わが国の乳幼児突然死候群(SIDS)の疫学とその正確な実態把握について		
51	福知山市在住の前期高齢者の健康と医療に関する調査研究		



主な訪問先一覧

主な訪問先一覧

福知山市 三和町 | 三和ってよくない?—農業の未来を考える—



大江町 毛原 | 北近畿の農福連携について



福知山市 綾部市 | ラジオ番組の制作・出演によるディレクション・口頭表現の能力向上



福知山市 大江町 | 大江町の買い物動向について



福知山市 | 地域社会の問題解決を試みる地域協働プロジェクトの実践



伊根町 | 観光地域づくりを巡る諸問題を考える





# 由良川屋形船プロジェクト

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-A (1回生)

担当者名 平野 真・井上 直樹・張 明軍

## 由良川屋形船プロジェクトの乗船料設定

水害を起こしてきた由良川のイメージを改善し、屋形船を運行して観光に生かすための調査を行い、福知山の地域活性化を検討した。実際に屋形船の運行を行っている地域を訪問し、観光協会のご担当者様から屋形船の歴史、運行状況などの説明を受けて、屋形船の見学を行った。これらの調査結果をもとに、インターネットなどで屋形船の運行にかかる費用の情報を収集し、損益分岐点分析によって事業の継続的な実施に必要な収益を見積り、一人あたりの乗船料を算出した。



## 由良川屋形船プロジェクトの調査

水害を起こしてきた由良川のイメージを改善し、屋形船を運行して観光に生かすための調査を行い、福知山の地域活性化を検討した。実際に由良川沿いを歩いて調査し、屋形船の航行に適するコースの候補を選定した。国、自治体など関係者との協議を行い、由良川周辺をドローンで撮影し、明智藪付近から乗船、寺町付近で下船する航行予定コースの設定を行った。航行予定コース周辺の歴史、見所などを調査し、ドローンの映像にあわせて音声で紹介するPR動画を作成した。



## 由良川屋形船プロジェクトの広報

水害を起こしてきた由良川のイメージを改善し、屋形船を運行して観光に生かすための調査を行い、福知山の地域活性化を検討した。由良川屋形船プロジェクトをPRするため、航行予定コース周辺の観光マップを作成した。また、SNSを活用し、由良川屋形船プロジェクトの進捗などを情報発信した。地元住民の方には郵送でアンケート調査を行い、由良川の観光利用についての意識を分析した。さらに、インターネット上にドローンで撮影した屋形船の航行予定コース周辺の映像を公開し、地域外の人々を含めた幅広い層に対して由良川の観光利用についてアンケート調査を実施した。



### 学生の気づき

最初に、印象に残っていることについて述べます。それは、嵐山視察です。昨年、インバウンドが注目されており、その中でも嵐山では、特に外国人観光客が多く、観光公害といった観点からどのように対策をしているのかが分かりました。

次に、特に学びになったと思うことについて述べます。それは、ゼミで行ったプロジェクトに関して、損益計算書を作ったことです。これによって、会計がどのように経営に影響を与えるのか、ビジネスにおいてどれほど重要であるのか、などを深く理解することができました。

最後に、反省点や次年度に向けての自分なりの課題について述べます。それは、経営や会計に関する知識が不足していたということです。次年度に向けて、経営や会計についてこの春休みを利用してもっと勉強しなければならぬと思いました。

上野 雄暉 | 地域経営学科 1回生 南山高等学校(愛知県)出身



# 福知山市三和町の地域課題

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-B (1回生)

担当者名 矢口 芳生・中尾 誠二

## 三和ってよくない?—農業の未来を考える—

三和農業は高齢化・若者担い手不足・低収入・耕作放棄地増大等の問題を抱えているが、三和ぶどう・万願寺甘唐辛子等で頑張っている生産者がいる。抱える問題を改善するために、自治体によるドローン等の農業機械の貸出し、農業体験ビジネスの導入、出張お助けサービス等の農業支援体制の整備等を提案した。(メンバー:井上僚太、明野由玖、伊藤空雅、神喰梨花、坂野井利緒、多川隼、豊田歩未、藤原尚大)



## 交流とは?—三和町で学んだ5つのこと—

教育・環境・催事・交通・情報の5項目について、その課題の改善・解決を提示した。三和学園でローカルアイデンティティ重視の教育、満杯に近づきつつあるゴミ処理「公社」との交流、三和フェスの内外広報、みわひまわりライドの実態の周知、これらも含め三和の魅力や定住者募集等の情報発信の必要性やフォトコンテストの開催等を提案した。(メンバー:橘川肇、榎原真理乃、田村輝、中西悠羅、中林衛、松下来未)



## 三和町及び農村地域の公共事業

三和町を対象とした様々な公共事業があるなかで、医療・介護(地域包括ケアシステム)、交通(ひまわりライド)、文化施設(三和荘)を取り上げ、そのあり方や問題点について指摘した。シビル・アメニティミニマムを後退させないように、行政はその役割をしっかりと果たし、地域住民は監視し自らも活性化に取り組むべき、との主張を展開した。(メンバー:上仲宏明、中村怜弥、西里大海、船津希、山内亜実)



### 学生の気づき

このゼミでの1番の収穫は地域にはおもしろい人がたくさんいると言うことを知れたことだと思う。三和のような過疎地域はどうしても若者から何も無いところと決めつけられ、見向きもされないところが少なからずあると思う。私も最初はそう思っていた部分もあった。しかし、実際その地域に入ってみると、自分の趣味や能力で他の人と交流している人や、伝統を受け継ぎ次世代につなげていこうと頑張っている人、この地域で頑張って特産品を作っている人など、多くのおもしろい人がいた。私も田舎出身なので、地元でおもしろい人を探してみたいと思った。地域で学んだことのアウトプットは感想文の共有でそれなりに出来たと思うが、インプットがあまり出来てなかったと思う。三和町に10回以上行っているのだから、三和の人口や高齢化率などの基本データは言えなければいけないと思うが、私はあまり自信がない。フィールドワークに多く行っているから自分は三和の事を知った気になっていたのかもしれない。これは来年の課題だと思う。

井上 僚太 | 地域経営学科 1回生 村岡高等学校(兵庫県)出身

この1年間矢口・中尾ゼミの元で、三和町について学んできました。時には座学で、時には実際に三和町へ赴き、農村地域への理解を深めました。このゼミで学ぶことが出来たことは主に2つあります。1つ目は現場では自分たちが想定しているよりもどうしようも無いことが多いという点です。私たちが授業で例を出されてその対策を考える、そのようなことを数多くしてきましたが、それが実際に現場に赴いてみると全く対策になっていないということがほとんどでした。このように実際に現場に行ってみないと分からない状況というものがあるのだと気づくことが出来ました。2つ目は、現地の人達の雰囲気は、話してみても初めて分かるということです。現地の人達はどのような風情に問題を抱えているのか、今後どのように地域が動いていくのかが分かります。それらは机に向かって学んでいるだけでは分ならず、実際に行ってみて初めて分かる事です。このようにゼミに参加したことによって、多くのことを学ぶことが出来ました。

中林 衛 | 地域経営学科 1回生 入善高等学校(富山県)出身



# 北近畿における地域の防災・居場所づくり

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-C(1回生)

担当者名 芦田 信之・垣内 康宏



## 地域とともに学ぶ防災(グループA)

福知山市社会福祉協議会(社協)と協働し、社協の地域活動を知る中で、特に災害ボランティアセンターの立ち上げや避難所の運営など防災について学び、得た知識をまとめながら福知山市の諸団体や地域住民の公民館活動の中で防災教育をおこなった。

## 北近畿の農福連携について(Bグループ)


CクラスのグループB(居場所づくり)では、前半は福知山社会福祉協議会のご協力を得て、地域サロン活動等に参加し、地域福祉の基礎を学んだ。後半は、農業を通じた障害者の方々の雇用促進と社会参加の取組である「農福連携」をテーマに実習を行った。具体的には、福知山市毛原地区の棚田保存の取組や、綾部市の有機農業の作業体験等に参加して、北近畿地域の農業の実際に触れた上で、京都府北部における農福連携のサテライト拠点である「リフレかやの里」を訪問し、障害者就労継続支援事業の現場を見学した。

## 学生の気づき


地域経営演習Ⅰ・Ⅱを受講したなかで、地域の多種多様な課題に向き合われている様々な方々との交流をすることができました。年間の学習を通して、私は地域での活動を、何をもちて合理的であるとするかが重要であると考えました。例えば、福知山市毛原の棚田保全という、地域住民の一念発起から始まった一連の取り組みです。

その地域は高齢化率が50以上のいわゆる限界集落であり、世帯数はわずか13戸です。そうしたなか、住民は各支援団体から情報を収集しながら、補助金やクラウドファンディング等を活用して、積極的な地域振興を行っています。生活必需品は揃えにくく、放棄してしまえば自然選択的に失われてしまうであろう過疎地域は、その土地を守るという住民の確固たる意志によって生き続けられるかもしれません。

自己の負担を顧みず地域振興に取り組む方々の、そうした一貫性のある選択に、私は地域活動の合理性を見出したと考えました。

 秋山 蒼  
医療福祉経営学科 1回生  
学校法人静岡理工科大学星陵高等学校(静岡県)出身

この一年を振り返って私は福知山市の様々な課題に対する解決策を学びました。私が1番印象に残っていることは、毛原地域で行われていた取り組みです。人口が29人と少ないですが、住民の方々が協力し合い様々な取り組みを行っていました。クラウドファンディングで資金を募集したり、棚田のオーナー制度を作り実際に運営をしてもらったり、ヨモギ栽培で耕作放棄地への対策を行ったりしていました。様々な地域で農家の後継者不足が問題になり、耕作放棄地が増えていることは知っていました。ですが、ヨモギ栽培をして耕作放棄地への対策ができることは知りませんでした。ヨモギ栽培は雑草を減らすだけでなく、収穫したヨモギをビジネスに変えられるためすごくいい案だなと思いました。様々な地域へ行き、それぞれの地域での課題解決の方法を知ることができました。これらの解決策を全国の同じ課題を持っている地域で応用できたらいいなと思いました。

 福田 佑乃  
地域経営学科 1回生 米子高等学校(鳥取県)出身

# 地域との協働実践を通して プロジェクトマネジメントを学ぶ

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-D(1回生)

担当者名 谷口 知弘・加藤 好雄



## 地域社会への理解を深める協働実践 ～大正地区公民まつりを通して

このグループ(大正ゼミ)では、社会調査手法とプロジェクトマネジメントの基礎を学び、地域に関わる態度や姿勢を身につけることを目的として、本学が位置する大正小学校区の大正地区公民館の調査と、大正地区公民館まつりへの参画を通して、住民自治活動に触れ、問題解決の活動を試みた。

公民館まつりへの参画では、担当する文化教養部会のみなさんと話し合い、「公民館まつりを通して住民と地域と結ぶ活動を実践する」ことを目標として取り組んだ。まずは、桃映地域公民館と大正地区公民館の聞き取り調査から始め、公民館まつりの運営会議への参加を通して問題を整理し、解決の活動を企画提案した。そして、模擬店(タビオカ)、体育館内活動(むかし遊び)、会場全体活用(ウォークラリー)、アンケート調査の4つの活動を行った。

実施後には、アンケート調査の報告書作成や公民館まつりに参加した桃映中学生との活動を振り返るワークショップを行った。

## ラジオ番組の制作・出演による ディレクション・口頭表現の能力向上

このグループでは、ディレクション・口頭表現の能力向上を目的として、綾部市のコミュニティラジオ局である「FMいかる」と連携し、学科別にラジオ番組の制作・出演を行った。


地域経営学科のテーマは「地方と国際化」で、日本に訪れる外国人が増加している中、今後、地方には国際化が必要なのかについて番組内で議論し、実際に外国人に日本の良い点や問題点についてインタビュー調査を行った。その結果、英語は緊急に必要なことになることはないものの、今後は必要になることを知ることができた。

医療福祉経営学科は、医療現場や福祉施設で働くために必要なスキルは何かを探るためにテーマは「医療現場で働くためのスキル」とした。知るための方法として、医療関係者にインタビュー調査をして、その結果をもとに番組内でどのようなことが必要になるかを議論している。また、この学科の地域への認知度向上のため、他の医療福祉系のテーマでフィールドワークを行っている演習に同行して、その様子を番組内で紹介している。


## 学生の気づき

地域活動に参加する前は地域住民どうしの繋がりが減っている現代で地域のことに無関心な人が増えているという先入観がありました。しかし実際に地域活動に参加しそこに住む住民は地域のことに全くの無関心であることはなく、抱えている問題に対し何とかしなければいけないという危機意識はあるのだとわかりました。次に連携することの大切さを理解しました。グループ同士や地域と大学生側の認識にズレが生じていることも多く、作業に影響が出たので進捗状況は勿論どういった意図で活動を行うのか確認し合うことが必要だと強く思いました。次年度はこまめな連絡を取り合っていきたいです。

最後に学内や学外で様々なネットワークを持つこと。「公民館まつり」のボランティア、舞台発表の演奏依頼など自分達の企画をよりスムーズに動かすためには人脈が必要不可欠であると感じました。地域が抱える問題を分析し解決できる場と繋げる。来年はそういった役割を果たすことができれば良いと考えます。

 朝野 晃生  
地域経営学科 1回生 綾部高等学校(京都府)出身

1年間の演習を振り返って、初めてラジオ番組をつくるという経験ができてとても貴重な時間になりました。演習の最初の時間にFMいかるの方からラジオのことや放送の基準等について話を聞いたことが印象に残っています。自ら番組のコンセプトや構成を考えることは大変でしたが、毎回目的を決めて収録ができるように取り組めました。また、農福連携についてフィールドワークを行っている他の演習に同行し、障害者の方が仕事をしている現場を自分の目で見ることで、障害者の在り方や働き方について考えさせられました。ラジオをすることで、口頭表現が身につくようになるのか疑問でしたが、実際にやってみて回を重ねるごとにうまく情報発信できるようになったことを実感しました。次年度は、今年学んだ医療福祉の活動も含めて、もっと医療福祉の知識を身につけ、地域と医療の関わりについてもっと理解を深めていきたいです。

 宮川 理瑚  
医療福祉経営学科 1回生 新湊高等学校(富山県)出身



魅力的な福知山土産って何だろう？



私たちは、今年度同時並行で2つのテーマについて一年間調査研究を進めてきた。一点目は、福知山土産についての調査である。「福知山のお土産って何が有名なだろう」そんなメンバーの共通疑問から生まれたこの調査は、実際に販売所の訪問から始まり、福知山の地域特産品に触れて私たちに、魅力的な「福知山土産像」を模索していった。二点目は、福知山城東側に位置する複合商業施設ゆらのガーデンへの利用法の提言である。出展者協議会の代表者へのヒアリング調査をもとに子育て世代にターゲットを設定し、独自に作成したアンケートを市内子育てサロンで実施した。全国的に高い出生率である福知山市の特性を生かした、持続可能性のある活用法を提言させていただいた。

六人部PA利用向上に向けた取り組みについて～売上向上に向けた提案～



私たちのチームは、舞鶴若狭自動車道にある六人部PAの利用向上に向けて一年間取り組んできた。六人部PAは福知山市に唯一あるPAであるが、それほど周知されておらず、売り上げも伸び悩んでいるところであった。そこで今年度から鄭先生指導の下、私たちはどうしたら六人部PAを多くの方に利用してもらえるか、どれだけのの人に認知してもらえるか、などを考えて活動を行ってきた。実際に六人部PAを訪問し、現地調査や意見交換を行った。学生の意見に対して真剣に耳を傾けて下さり、時には厳しい意見も頂けた事で取り組みを深める事が出来た。そして最終的にPOPを作成し、実際に店舗に設置させて頂いた。

JR西日本福知山駅地域共生スペース活用プロジェクト ぽっぽがかり活動報告



長らくシャッターの降りていた、JR西日本福知山駅のミスタードーナツ裏の空き店舗。今年度地域共生スペースとして再出発を遂げた。私たちぽっぽがかりは、地域共生スペースをどう活用すれば駅が、福知山が活性化されるのか、大学生の視点から案を考えるべく1年間活動してきた。現地調査から始まり、福知山駅での聞き込み調査、福桔祭で休憩スペースとして地域共生スペースを解放、そしてアイデアソンを行ってきた。その中で見えてきたのは、電車を待つ高校生や親子連れに地域共生スペースは需要があるということである。私たちの代は提案で終わってしまうが、ぜひ継続的に活動し、より良い地域共生スペースの活用方法を見出して欲しい。

学生の気づき

地域経営演習では、一年間ゆらの源チームとして『ゆらのガーデンお土産開発プロジェクト』という活動を行いました。前期では、『未永く市民に愛されるゆらのガーデン』をテーマにゆらのガーデンを観光客および地元市民により多く活用してもらう場所にするために、現状分析・課題抽出を行い、それに基づいた仮説を立て中間的提案を行いました。後期では、前期で挙げた課題についてより深く考え、最終提言まで行いました。私がこの一年間を通して印象に残ったことは、実際に地域の経営者の方からお話を聞いたり経営のことについて考え、触れることが出来たことです。どのようにしたらゆらのガーデンを地域の人により多く利用していただけるのかなど、経営者側の視点で地域に接することができ、良い経験となりました。また、反省点としては、活動の進展が遅く最初に立てた最終目標にたどり着けなかったことが挙げられます。しかし、この事も経営の難しさを知る良い学びとなりました。

今道 竜之介  
地域経営学科 1回生 五島高等学校(長崎県)出身

大江町の買い物動向について

私たちの班は大江町の買い物動向について調査した。調査の目的は、大江町の住民にとって買い物状況が利用しやすい環境にあるかどうかを明らかにすることであった。今回の調査では、買い物の定義を最寄り品に限定して考えた。最終目標は買い物動向に関する調査票調査の実施であり、店舗側と消費者側にインタビューを行った。また、調査方法はGISやRESASを用いた大江町の情報収集、インタビューの事前学習として文献調査、インタビュー調査であった。報告内容は、大江町について、大江町の買い物圏について、事業者の現状、地域住民の現状、調査票調査に向けて、現地報告会についてである。買い物圏とは、大江町の店舗の位置から中心点を設定し、中心点から40kmでアクセス可能な範囲のことを指している。今回の調査から、大江町では自助・共助の意識が高い一方で、公助の意識がやや弱い点が見受けられた。また、将来的に車の運転ができない人などが想定され、今後、買い物難民の発生の懸念があることなどがわかった。

大江と由良川

私たちのゼミでは福知山市北部に位置する大江町についての調査を行った。その中でも私たちの班は特に「大江町と由良川」との歴史や関係性を調べてきた。大江町は昔から台風などの大雨が降った際の由良川の氾濫で多くの水害を受けてきた地域である。そんな大江町に住む人たちがこれまでどのような被害を受け、どのような対策をし、どんな思いで大江町に住んでいるのかを住民へのインタビューや大江町にまつわる文献で調査した。調査のなかで大江町と由良川は切っても切り離せない関係があり、由良川はすぐに氾濫し大江町の人々を困らせるだけでなく、昔から大江町の人々の生活に欠かせない川であることが分かった。今回の報告会では大江町にとって由良川とはどのような役割を担っており、水害に対する対策として実際にどのような河川整備が行われてきたのかを報告する。

大江町の観光とモビリティ

私たちは「大江町の観光とモビリティ」について調査した。モビリティとは移動・動きやすさを指す言葉で、今回は移動手段に焦点を当てて調査をした。調査目的は文献調査やフィールドワークから大江町観光の課題を見つけ、解決に向けて考察することだ。課題として各主要都市から大江町に来ること自体は可能だが、観光スポットまで行くには移動手段に限られ困難なことが判明した。まず公共交通機関である電車について、1時間おきに通っているため大江町内に行くことは困難でない。一方でバスは日中を中心に本数が少ない。次に主な観光スポットを7カ所挙げ、移動手段として車、公共交通機関(電車、バス)、徒歩の2つの観点から分析を行った。フィールドワーク・類型化による分析から、大江町観光は魅力が多くあるものの、駅に着いてからの移動手段が少なかった。また魅力の発信がうまく出来ていないことも分かった。このことから移動手段の種類、頻度、魅力の発信の3つの改善が必要と考察した。

学生の気づき

一年間を通して、大江町の買い物動向について考えてきました。その中で私が一番重要だと感じたのは事前調査です。大江町の買い物動向を調べるうえで、何度かインタビュー調査、フィールドワークを行いました。事前調査の在りなしで成果に大きな差が生じることを実感しました。何も知らない状態で現地に行っても、話してくれる相手側にも失礼であり、得られる情報に限度があるように感じました。インタビュー相手のことに興味関心を持ち事前に知識をつけることで自分たちが知りたかった情報以上のことを話してもらうことができました。しかし、情報収集の大変さも知りました。最初は何をすればいいのかわからない状態でしたが講義の回数を重ねるごとに少しずつ方法を知ることができました。事前調査を行うことは2回生になっても大切にしていきたいです。この1年で地域に入りたくさんの人に会えたことに感謝したいです。

中元 裕哉 | 地域経営学科 1回生 小松島高等学校(徳島県)出身





## 夜久野町における地域資源のデジタルアーカイブ

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-G(1回生)

担当者名 神谷 達夫・江上 直樹

### 夜久野町における地域資源のデジタルアーカイブ

このグループでは、人口が減少している地域における文化の保存を目的に、地域資源をデジタルデータ化して保存するデジタルアーカイブの作成を目指して活動した。活動は夜久野町を対象とし、デジタルアーカイブの方法としてはWikipedia記事の作成と3Dスキャナを用いた3Dデータの作成を採用した。Wikipedia記事は夜久野町史を参照して作成し「夜久野町における丹波漆と漆掻き」「額田のダシ行事」という二つの記事を公開した。インターネット上に夜久野町の情報を増やすことができたことが主な成果といえる。3Dスキャナでは、化石などの3Dデータの作成を行った。これは、より充実したデジタルアーカイブ作成の足掛かりになったと考えられる。Wikipedia記事では夜久野町史以外の文献も参照し内容を拡充させること、3Dスキャナでは化石など地域資源の3Dデータ化を通して実際に地域に貢献することが今後の課題といえる。



### 夜久野町における地域資源のデジタルアーカイブ化の取り組み

夜久野町の人口推移は年々減少傾向にあり、夜久野町の知識や文化の伝承が難しくなっている。そこで本研究では、夜久野町の文化に関する情報をインターネット上にアップロードすることで恒久的に保存することを目的とした。先行事例として「ウィキペディアタウン」という地域の文化財の情報を保存する活動に着目し、本研究においても同様の活動を行った。本グループが担当した「額田祭」、「丹波漆」、「夜久野そば」の記事を作成するために夜久野町史を引用したり、実際に現地に足を運び取材を行った。今後の展開として、デジタルアーカイブ化する対象をさらに増やすこと、アップロードした記事のURLをQRコード化して、アクセスの簡易化を図ることなどが考えられる。



### 夜久野町における観光資源の保存と広報について-Wikipedia Townの取り組みを通して-

夜久野町における観光資源の保存と広報の在り方に着目し調査研究を行った。本報告では、公文書や文化財をデジタル化して保存する「デジタルアーカイブ」の取り組みの中でも、特に郷土資料を用いて調べたものをウィキペディアに記事として載せる「Wikipedia Town」という活動について発表を行う。初めに「デジタルアーカイブ」および「Wikipedia Town」に関する先行事例を紹介した後、夜久野町の観光資源である「額田のダシ行事」「夜久野高原八十八ヶ所石仏巡り」「銀河鉄道」と夜久野市の関わり、その取り組み結果について報告する。



### 学生の気づき

Wikipediaの記事を作成したことが印象に残っています。  
アカウントを作るところ、つまり0からのスタートでしたが、テンプレートなどのツールを用いて編集を行いました。初心者なので至らない点も多く、たとえば外部リンクの欄にYouTubeのurlを貼ろうと思ったものの上手くいかなかったのですが、ダメ元でタイトルだけ直打ちしたところ、次の日には有識者がリンク付けしてくださったことがとても印象深かったです。知らぬ誰かが意図を汲み取ってサポートしてくださるというのが新しく、楽しい経験でした。Wikipedia共同編集者の一人からは、記事の作成について感謝のお言葉もいただきました。  
折角作ったアカウントですので、私も「額田のダシ行事」の記事がもっと多くの人の目につきやすいように類似記事とのリンク付けを行ったり、他記事の(根拠に基づいた)編集を行うことを続けていきます。

柴田 青衣礼 | 医療福祉経営学科1回生 浜松北高等学校(静岡県)出身



## 地域の国際化について考える

科目名 地域経営演習Ⅲ(2回生)

担当者名 大谷 杏



本演習の目的は、地域の国際化について主に観光や多文化の観点から学ぶことである。初めに、文献の輪読を通して、日本人が見せたい日本と外国人が魅了される日本との違い、つまり文化的差異から生じる感覚や価値観の違いについて検討した。その後、福知山観光ガイドの会会長、大江地域観光案内倶楽部会長からお話を伺い、大江の日本鬼の交流博物館を訪れたことで福知山のインバウンドの現状を把握した。舞鶴市では担当者の方から市の取り組みについての詳細を、舞鶴引揚記念館では抑留を体験された語り部の方から直接お話を伺うという貴重な体験をさせていただいた。テレビ局の取材が入ったため、その模様は終戦記念日に全国放送された。



## 知恵を集めて未来をつくる場「ワークショップ」の理論と実践を学ぶ

科目名 地域経営演習Ⅲ(2回生)

担当者名 谷口 知弘

本演習の前半は、ワークショップの基本的な理論と技法を学ぶことに重点をおき、講義に加えてワークショップを体験して理解を深めた。後半では、日々の暮らしや地域を見つめ直し、共通する関心のテーマで3つのチームを作り、地域と協働でワークショップ「暮らしとまちを見直す井戸端会議」を開催し実践力を養った。

次の3つのテーマ、3つのチームで実施した。

- ボードゲームから拡がる多世代交流
- これからの福知山のスイーツの話をしよう
- 昔懐かし駄菓子屋を未来へつなぐワークショップ  
～駄菓子屋の持つ魅力を可視化しよう～

これらのワークショップの企画から実践にいたるプロセスを通して、多様な価値観や多世代の人々が集い話し合うことや知恵を集めることの重要性と可能性を体験的に学んだ。





## 観光地域づくりの観点から 海の京都観光圏を考える

科目名 地域経営演習Ⅳ(2回生)

担当者名 佐藤 充



本演習は、観光分野の学術的な文献から理論的な枠組みを理解し、また社会調査の手法を用いて、観光地の現状と問題点を分析することが目的であった。半年間を通じて、まず、観光学の基礎的な文献を輪読した。その上で、統計資料の収集や訪問調査を行い、各自の視点から、海の京都観光圏における観光の現状と課題を明らかにした。

学生は、購読文献のレジュメ作成・報告という個人ワークを行うとともに、海の京都観光圏の周遊プラン立案・提案というグループワークに取り組んでもらった。なお、提案された周遊プランはゼミ内で実施され、海の京都観光圏の観光資源の把握に努めた。



## すぐれたコンセプトの研究と創造

科目名 地域経営演習Ⅳ(2回生)

担当者名 塩見 直紀



コンセプトは商品開発、起業、まちづくりなど、ものごとの成功や価値の8割くらいを占める大事なもの。当ゼミでは以下のことをおこなう。①日本～世界事例、出身県事例、福知山事例を毎回個別調査・発表を繰り返し、すぐれたコンセプトとは何かを考察。②企業や個人がコンセプト考案の参考となる冊子を作成(「グッドコンセプトAtoZ」)。③コンセプトメーカーになるためのコンセプトスクールを毎回実施。④福知山市役所シティプロモーションからの依頼で大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公・明智光秀公をテーマにした問題集「明智光秀×福知山IDEABOOK」を制作。冊子は福知山光秀ミュージアムを訪れる子どもたちに手渡される。



## 中国語能力のレベルアップと インバウンド観光への実践

科目名 地域経営演習Ⅳ(2回生)

担当者名 張 明軍



グローバル人材に求められる中国語能力を育成するため、本演習ゼミでは①ゼミ生の個人研究発表を通じて、より深く中国の全般を理解する。②就職活動向けの資格取得の一つとして、HSK(中国語能力試験)の受験対策を行い、初めてHSK試験(本学会場)を実施した。③地方観光地における中国語観光案内実践を実施し、中国語の応用、中国語観光客の誘致に必要な受け入れ対策や気づきをまとめた。この三つの項目を通じて、まず、「中国雲南省における珈琲栽培」、「中国の現代娯楽」、「中国のレンタルサイクルの現状と課題」、「中国の巨大企業」等のテーマ発表でより深く現代中国を理解できた。②HSK試験を実施した。今後学内において、ゼミ生を含めて、より多くの学生が三級、四級に合格するように指導する。中国人との観光案内実践を通じて、中国語の応用練習もでき、美山町かやぶきの里のインバウンド観光の受入課題をゼミ生達の視点でまとめた。ビデオ資料:YouTubeで「中国観光案内実践 美山編」で検索してください。



## 京都府北部における農林業及び 農福連携の現状について

科目名 地域経営演習Ⅳ(2回生)

担当者名 垣内 康宏



本演習では、京都府北部における農林業及び農福連携の現状について、現地視察及び体験学習を行うことにより理解を深めた。具体的には、あやべゲンゼスクエアや黒谷和紙協同組合を訪問し、綾部市の養蚕業の歴史とゲンゼ社の地域・社会貢献について理解を深めるとともに、800年近く続く伝統工芸の和紙づくりを実際に体験した。その上で、京都府北部における農福連携のサテライト拠点である「リフレかやの里」を訪問し、障害者就労継続支援事業の現場を見学した。







本演習では、京丹波町にある道の駅「味夢の里」と福知山市との間における人の往來の分析をテーマとして選択した。この区間の往來に注目した理由は、海の京都DMOによって設置されたWi-Fiパケットセンサーにより「味夢の里」と福知山市の間に合理的な理由の説明ができない往來の存在が判明したためである。

分析には、ディープラーニングと機械学習を用いた。処理の対象は、インターネット上に書かれたブログ等の文書情報である。研究の結果、ディープラーニングによる方法と機械学習による方法のどちらでも、文書情報から80%程度の正答率で「味夢の里」に行った者で福知山に行っていない者を判別できるモデルを得ることができた。

### 学生の気づき

始めた当初は方向性も何も定まっていませんでしたが、担当教員からのアドバイスも受け、なんとか形にできました。印象に残っていることは、ゼミ活動中にゼミ以外に関して話している時間が多かったことです。本ゼミでは基本的にパソコンを使わないと作業がほぼできない状態であったため、パソコンを利用しない時間には、ゼミ生と教員の会話を聞いたり、教員からの就活に関するアドバイスなどを受けたりしました。後半ではパソコンを持ってく

るようになり、ゼミ活動中に作業を進められました。ゼミで学んだことは、課題目標設定の難しさです。最初に方向性を決めることはもちろん、研究を進める過程の組み立て方、また、研究で得られた結果から自分なりの解釈を導き出すことなど、自由度が高いがゆえに悩み、良い経験になりました。今後の課題として、研究の目的や意義及び解釈を明確化することが挙げられます。そのためには、自分自身が研究内容をより理解する必要があります。

山本 隆志 | 地域経営学科 3年生 福知山高等学校(京都府)出身

## AI技術を用いた地域情報の分析

— 福知山市—京丹波町間の観光者行動 —

神谷達夫・山本隆志・玉井 晶也・古澤風  
(福知山公立大学)

### 1 はじめに

深刻な人口減少に直面している地域において、業務の高度化による人手不足の解消のためには、AI (Artificial Intelligence) をはじめとする情報技術の利用が課題解決の一助になると考えられる。しかし、AI人材の不足から、地方都市においてはAI技術の普及が遅れており、十分に活用されているとは言い難い。

情報技術に長けた人材の確保のためには、他地域から人材を導入するのではなく、その地域で人材を育成することが重要である。特に、現在AIやデータ分析関連の人材は、全国的に不足している確保が難しいため、地域内におけるAI人材の養成は重要である。本報告では、AI技術によって地域情報を処理する例を示すことにより、AI技術の普及を促進する方法を検討する。

本報告では、京都府船井郡京丹波町にある「味夢の里」と京都府福知山市の間での人の往來を分析することにより、AI技術の有用性を示す。この「味夢の里」と福知山市の間の往來に注目した理由は、海の京都DMOにより設置されたWi-Fiパケットセンサー[1]により「味夢の里」と福知山市の間に無視できない往來が存在することが判明し、その往來に対しての合理的な理由の説明が困難であったためである。

### 2 方法

普及期に達しているAI技術を用い、非専門の者にもAI技術の利用が可能であることを示す。本報告では、主に2つの技術を用いた。その1つはディープラーニングであり、もう1つは機械学習を用いた方法である。本報告では、機械学習にロジスティック回帰分析を用いた。

処理の対象は、インターネット上に書かれたブログ等の文書情報である。この文書情報を形態素解析し、重要語を見つけ、その語の出現頻度により「味夢の里」に立ち寄った者で福知山市との間に移動のあった者とそうでない者の特徴を分別した。

### 3 結果

ディープラーニングによる方法とロジスティック回帰分析による方法のどちらでも、文書情報から80%程度の正答率で「味夢の里」に行った者で福知山に行っていない者を判別できるモデルを得ることができた。

### 4 まとめ

普及期に達している平易なAI技術によっても、地域情報の分析ができることを示すことができた。この成果をまとめ、解説することにより、地域のAI人材の養成に貢献できるものと考えられる。

参考文献: [1] 神谷達夫, 位置情報データを活用した観光地分析: 海の京都観光圏Wi-Fiパケットセンサーの情報解析から. 日本観光学会誌 第58号 pp.41-48 2018.





外国人労働者が急増している日本。福知山もその例外ではなく、現在、多くの外国人が暮らしている。彼らはなぜ日本に来たのか、日本という異文化の土地でどのように生活しているのか、日本の社会には外国人を受け入れる制度が整っているのか、そしてどのような体制づくりが求められるのか。こうした疑問を持って、この演習はス


タートした。そして、その答えを探るために、①外国人労働者に関する文献の購読、②地域で暮らす外国人へのインタビューや交流、③各種メディアの学習を行なった。普段、近くで暮らしながら接することの少ない外国人の人々の目を通して日本の社会を見つめ、より良い共生社会のあり方について考えた1年間であった。

### 学生の気づき

このゼミでは、1年間に渡って外国人労働者についての学びを深めてきました。文献購読や動画視聴、さらにはインタビューを通して外国人労働者の現状を知り、そこから私たちに何が出来るのかを考え、活動してきました。現在でも日本では、私たちの見えないところで多くの外国人労働者が過酷な環境下で働かされています。このような現状がある中で、いかに外国人労働者の声を聞いてあげられるか、そしてより良い労働環境をつくるために、雇用主と外国人労働者を繋ぐ架け橋となる人の存在が大切であることに気づきました。日本では、様々な社会変化の中で、今後も外国人労働者が増えていくと思います。その中で決して偏見の目を持つことなく、相手に寄り添い、同じ目線に立って、その人を理解しようとする力が求められると思いました。1年間のゼミ活動を通して、今後もさらに学びを深め、外国人労働者のより良い労働環境づくりに携わってまいります。

 **南出 愛乃**  
地域経営学科 3回生 金津高等学校(福井県)出身

私はゼミに入るまで外国人労働者の事についての知識が全くありませんでした。文献調査や企業訪問、関連映像を調べていく上で日本での外国人労働者の現状について知ることが出来ました。その中でも印象に残っていることは、外国人労働者の方々が様々な努力をして日本に来て仕事をなさっていることと、それに依存しなければならない今の日本についてです。留学生ビジネスや技能実習生、言語の壁といった未だに多く問題がある中で、外国人の方々は日本で暮らす為に多くの努力をしていることを身に染みて感じる事が出来ました。これから外国人労働者の方々が増えていく時代になっていくため、私自身も負けないように残りの大学生活を有意義な時間とし、社会に出て行きたいです。

 **八木 一匡**  
地域経営学科 3回生 長岡大手高等学校(新潟県)出身

## 外国人労働者のいる社会： より良い共生社会を目指して

南出愛乃 八木一匡 +渋谷節子

### 1. 文献購読

- (1) テキスト『新移民時代～外国人労働者と共に生きる社会へ』
- (2) 学術論文(各自検索)

#### 学んだこと

- ◆以前は、留学生の存在は知っていたものの、日本に働きに来る外国人がいることをほとんど知らなかったが、文献を読んでたくさんの外国の人が日本で苦勞しながら働いていることを学んだ。
- ◆外国人労働者をとりまく環境はまだまだ悪いことがわかった。外国の事例などを参考にしながら、環境を整備することが大切だと感じた。



### 2. フィールドワーク

- (1) 長田野工業団地の外国人労働者のインタビュー
- (2) 福知山市日本語教室で学ぶ外国人のインタビュー
- (3) 福知山市多文化交流フェスタで外国人市民と交流

#### 学んだこと

- ◆福知山市で働く外国人の方たちに日本での仕事や生活について、話を聞いた。仕事の内容や、生活で困っていることなどを聞き、出身国と日本の違いなどの話をきくことができた。
- ◆外国人労働者を受け入れる企業の環境も大切だということが、わかった。見学させてもらった会社では、日本人と外国人の距離が近く、良い関係を築いていることが印象的であった。



### 3. 各種メディアの学習

- (1) ドイツの移民・難民問題のドキュメンタリー
- (2) 外国人労働者の支援活動をしている日本人のドキュメンタリー

#### 学んだこと

- ◆外国でも、移民や外国人労働者のことが問題になっていることを知った。テロの危険や仕事を外国人にとられるなどの社会経済的な不安がほかの国でもあることがわかったが、これからは世界で移民が増えると思われるので、彼らの生活を保障することが大切だと感じた。
- ◆外国人の支援をしている人の活動を見て、企業や行政と当事者(外国人労働者)の間に入って調整する人の重要性を認識した。また、関係者が連携して制度作りや法律の整備をしていくことの重要性も、改めて認識させられた。



### 4. まとめ -このゼミで勉強したことと今後

- ◆このゼミで初めて外国人労働者を取り巻く環境について勉強したり、実際に外国人の方たちと交流したりすることによって、今までは遠い話だと思っていた外国人労働者のことやその問題を、身近な問題として考えられるようになった。
- ◆外国人労働者をとりまく環境が悪く、多くの人が苦勞しながら日本で働いているという現状を、もっと多くの人に知ってもらいたいと思い、今後そのような機会があれば、積極的に発信していきたいと思う。
- ◆今後、自分か会社などで外国人の人と一緒に働くようになったら、頼られすぎないように注意しながらも、支援をしていきたいと思った。







本演習では、経営学・経営科学の諸理論と分析アプローチに基づく「文理融合型経営学」を学習している。「地域経営研究Ⅰ」では、経営学の全般的な基礎と、確率・統計の基礎を学習する上で、「地域経営研究Ⅱ」では「地域経営研究Ⅰ」の学習成果を踏まえて、経営戦略・ビジネスモデルに関する専門書や論文を読むとともに、主として多

変量解析(例えば、線形回帰分析、非線形回帰分析、数量化理論Ⅰ類等)の基本的な内容を学習している。その他に、「一因子情報路モデル」、「マルコフ連鎖」の基本も指導しており、英語の論文も定期的に読んでいます。これにより、定性的な理論と定量的な分析方法を兼ね備えた文理融合的演習を展開している。

2019年度地域協働型実践教育報告会  
地域経営研究Ⅰ・Ⅱ 鄭年皓ゼミ  
阿部将大 石井興志 石山烈太 上野海 小林達彦 仲倉未来 都中村緋佑 西澤七海 長谷川貴大 三樹颯斗 宮内諒輔 石橋真紀

キャリアよりも授業の濃さを  
為にならない授業を受けるほど、私の人生に余裕はない。

【ゼミの内容について】  
経営を工学的な視点から考える鄭ゼミ。経営学・統計学的思考を導入、経営モデルと統計モデルを自ら編み出すための分析方法を学習しています。分析手法を学ぶだけでなく、多様な観点から豊かに発想する力を身につけていきます。

【ゼミでの活動】  
通常の授業以外にも、サブゼミ、懇話会などを開催しており、よく遊び、よく学ぶゼミです。1泊2日で城崎温泉に行く合宿などもあり、様々な体験をしたり、同じゼミの人たちとも仲良くなる機会がたくさんあります。毎々が、とても充実した1年になると思います。

学生の気づき

課題の量は多かったですが、その分、自分の実力として身につけていったことが1年を通して実感でき、それがとても印象に残りました。講義や課題をこなす上で、様々な分析方法を学ぶことができ、各種データに対し、いろいろなアプローチで分析できるようになりました。また、過去の企業や自治体の成功事例、論文や記事を見ることで、実践的な知識も身につけることができました。反省点は、復習が足りなかったことです。一つ一つの分析法を完璧に理解し切る前に次の分析を学んでいき、それを積み重ねてしまったことです。次年度は、今年度学んだことを完璧にし、復習により一層力を入れ、その上で、新たな理論や分析法を学んでいきたいです。そして、就職(現段階では自治体職員志望)したあとも、ゼミで学んだことを活かしつつ、自治体の第一線で活躍できるような人材になりたいです。

阿部 将大  
地域経営学科 3年生 水沢高等学校(岩手県)出身

通常授業の他に、サブゼミやゼミ合宿もあり、大学生活がとても充実したものとなりました。講義内容は、経営モデルと統計モデルを自ら編み出すための分析手法を一から学びました。「経営学専攻です」と人に言えるだけの全般的な前提知識を得られたことが嬉しいですね。ゼミでの最も大きな収穫が、数理的根拠を用いることで、ユニークな理論に妥当性を持たせる技術を学ぶことができた点です。3年生ゼミの1年間での学びが多く、卒業研究のテーマも早い段階で方向性を定めることができました。来年度は、関連書籍や学術論文の情報収集から始めていこうと考えています。私は、社会的価値を創造する多角化戦略のイノベーションについて研究します。企業が何らかの社会課題の解決を目指し、発展途上国や、国内の疎外地域において事業を拡げることで、企業内外に産業の多角化が生まれ、地域のシナジー効果も期待されるというものです。

石橋 真紀  
地域経営学科 3年生 Madison Area Technical College (WI, USA) 出身



# 地域社会の問題解決を試みる 地域協働プロジェクトの実践

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 谷口 知弘



本演習は、問題発見から解決に至る協働型デザインプロセスをチームで企画・運営することでファシリテーションやプロジェクトマネジメントの実践能力を身につけることを目的として1年間活動した。17名のメンバーは、関心の高いテーマに集い4つのチームをつくり、福知山市の中心市街地をフィールドに次の4つのテーマで取り組んだ。

- 銭湯経営の現状と観光資源に関する研究と実践  
～福知山市唯一の銭湯「櫻湯」での試みを通して～
- 「進学移住」学生の地域関心度向上を目的とした居住に関する総合情報プラットフォーム事業について
- 地域での祭りによる効果の研究と実践  
～花火大会の復活プロセスを通してみんなで蘇らせる福知山～
- 商店街の空き店舗を活用したアート活動による地域交流の展開

## 学生の気づき

谷口ゼミは、ゼミ内で4つのグループに分かれて活動している。どれも地域に入って、地域と一緒にやっていく活動である。私が、編入を決めたきっかけとして、福知山公立大学を知った際、地域創生というワードに目を付けた。実際に地域に入り多くの活動を行っている。ここまで学生が地域に入り、ある程度の制限はあるが、割と自由に地域をいじらせてくれる。こんな地域はなかなかないと思いついて入学を決めた。そこでさらにゼミ選択の際、地域にはいった活動が活発にできそうな谷口ゼミに入った。まだまだ知らないことは多いが、常に地域と関わるゼミを行っていたので1年間で、ぐっと福知山を知ることができた気がする。個人の活動としては、卒業研究に向けての材料集め、知識集めをしかり行えた。しかし、地域と一緒にやっていくということで、地域の方との連携は必須になる。そこが甘くて、連携がうまくいかず、活動がなかなか進まなかったという大きな反省点がある。同じプロジェクトを4年でも続けるので、就職活動と両立しながら、一年後良い成果報告ができるようにしていきたいです。

井口 佳奈  
地域経営学科 3年生 日本外国語専門学校出身

2019年度谷口ゼミの研究実践は、個々の興味関心によって4つのプロジェクトに別れて活動を行った。その中で感じたのは学生の連携の必要性だ。活動の拠点を大学サテライトキャンパスの吹風舎に置き、新町周辺地域を中心に活動してきた。もちろん最終的な目的は地域に活力を与えることであり、プロジェクトの成功ではない。しかしこの1年間は各々の活動を回していくことに注力してしまい、本質的な部分を見失っていたのではないだろうか。

イベントを開催する場合でも持続可能性、継続可能性を求められる。いくら学校活動とはいえ、大学生数人でイベントを継続していくことは難しい。少なくとも卒業してしまえば今いる学生はいなくなってしまう。その中でどうすれば地域が盛り上がる「仕組み」を作ることができるか。それはプロジェクト単位ではなくゼミナール単位、もっと言えば学校単位で連携し、より多くの人を巻き込むことにチャンスがあるはずだ。大学生同士の横のつながり、大学生同士の新結合が求められる。

竹内 就人  
地域経営学科 3年生 鳥取西高等学校(鳥取県)出身





「大都市圏外の地域活性化」を大テーマにする当研究室では今年度、ゼミ生12人それぞれが関心ある課題を設定し、各人もしくは数人のグループで現地調査等を行った。


前学期は、福知山市内外で引きこもり者をサポートしているNPO法人の「農福連携」活動を体験させていただいたり、兵庫県豊岡市出石町「奥山ほたる祭」や京都府綾部市の里山ゲストハウス「クチャー

ル」で地域経営演習2回生ゼミと合同フィールドワークを行ったりした。


後学期は、京都府中丹広域振興局・京丹後市雇用促進協議会・兵庫県朝来市と布土地域から学内ゼミ時に来ていただき、合同での調査を模索した。その結果、中丹企業班・田舎結婚式班…等に分かれ調査研究を行うことになった。

### 学生の気づき

今年のゼミ活動の中で一番印象に残っていることは、ゲストハウスの幸嘉庵さんへヒアリング調査を実施したこと。1・2年生の頃に実習してきた地域経営演習は、調査のテーマやヒアリング先の決定、相手へのアポイント、移動手段の確保などのほとんどは先生が行い、学生は与えられたことをするだけでした。しかし、今年のゼミで行ったフィールドワークの中には、学生達自身がこれらの準備を行い、調査も学生のみが参加するというものが何度もありました。幸嘉庵さんへの宿泊を伴った調査は、初めて学生のみで主体的に行ったものでした。あらかじめ準備はしていたものの、ヒアリングでは、限られた時間を有効に活用できず、決して十分とは言えない調査でした。その後も、学生のみで調査を行うことが数回ありました。こうした実践を通して、相手へのコミュニケーションや素早く質問を考えることが以前よりもできるようになりました。


 河上 惇太郎  
地域経営学科 3回生 富山第一高等学校(富山県)出身

ゼミを通して、特に学びになったと思うことは、大学外活動の体験です。前期は自分が気になる、興味のあるイベントに参加し、後期は調査内容を定めることからヒアリング調査まで、自身で決め行動する形式でした。どちらも大学外の人と関わる機会が多くあり、対話と質問の二つを鍛えることができたと思っています。反省点や次年度に向けての自分なりの課題は知識面と事前準備です。人から話を聞く際に自分が知らない単語やある程度の概要を知っていなければ理解しにくいものが多いと、理解が追い付かないことや話を深めるための質問ができないと貴重な機会を無駄にしていると思います。また、事前に基本的な情報を調べて、知っておくことで何を質問するか、何が聞きたいかをはっきりさせることができるとも思います。


 鈴木 健心  
地域経営学科 3回生 岡崎北高等学校(愛知県)出身

### 学生の気づき

ゼミでの取り組みについてまず前期の時点では大まかに卒業論文のテーマを決め、それについての情報収集や兵庫県豊岡市の奥山ほたるの郷への民泊と活動の幅は余り広くなく、論文テーマに関しても元々1年次のテーマの延長であり深く掘り下げることが出来ませんでした。しかし夏季休暇中のインターンシップをきっかけに後期から中丹振興局の大学連携事業に参画することになり、論文テーマも再考する機会になりました。主な活動内容としては中丹地域のビジネスにつながる魅力を集めてカタログにする準備として舞鶴を調査地域とし、舞鶴の基本情報や地域資源を様々な企業や市役所へのヒアリング調査を通して集めました。この活動を通して研究テーマについて新たに考えることが出来た他、企業を対象としたヒアリング調査について手法の学習と経験を積む事が出来ました。次年度ではまだ活動の中で論文テーマをどうしていくかまとめきれないで、テーマと内容を固めていきたいと思っています。


 夏田 康成  
地域経営学科 3回生 日向高等学校(宮崎県)出身

私が中尾ゼミにおいて印象に残っていることとしては綾部市の民泊連携協議が挙げられます。その際に起きた出来事も印象に残っていますがやはり私の報告会のテーマとなったテラハクとの出会いの場であり、あの日行っていなければまた違うテーマになっていたといえるでしょう。また卒業研究についてもテラハクについて調べていくつもりであり、この民泊がターニングポイントだったといえます。しかし、この1年のゼミ活動である民泊などにあまりいけなかったことがありそこが反省点として挙げられます。テラハクの料金が低いということもありますが時間の都合がつかなかったという点もあり、来年度ではより積極的にテラハクを行っていきたいと思う。他にも自分への課題として、聞き取り調査など行った際により多くのことを質問できるようにすることが課題として挙げられます。より多くの質問ができるになればそれだけ研究の質を上げることができるでしょう。このように1年間を通して得るものがあつたとともに課題も残ったので来年度ではこれらを考慮して卒業研究を進めていきたいです。


 藤原 尚輝  
地域経営学科 3回生 生野高等学校(兵庫県)出身

1年間の地域経営研究を振り返って印象に残っていることは、全但バスの貨客(客貨)混載についての調査です。昨年度までの地域経営演習では事前調査の後、聞き取り調査という流れはあまりありませんでした。しかし、地域経営研究では、事前にどのような事業なのか、他の研究者はどのように考えているか、どこが疑問なのかについて明確にし、現地に足を運んだことにより具体的な質問等を行うことができました。

その中でも特に学びになったと思う事は、調査先へのアポイントメントです。今まで、アポイントメントをとって話を聞くことはそう多くありませんでした。SNSやメールでのコミュニケーションが中心となってしまっているので、電話で人と話すことが学びになり、研究のみならず、就活や今後の人生のためにも役立つ学びとなりました。次年度以降は今年度以上に他の学生と進めることが多くなるので、研究の軸をしっかりと持ち、他の考えも取り入れながら取り組んでいきたいです。

 森岡 信照  
地域経営学科 3回生 神港高等学校(兵庫県)出身

私は諸事情により、後期からの参加となりましたのでどのように入っていけばよいのか分かりませんでした。教授・ゼミ生等のサポートもあり、うまく溶け込むことができたと思います。特に印象に残っていることは自分の興味ある分野の研究に思いきり取り組むことができたことです。また、自分の研究をゼミ全体に発表し、質問をいただくことで新たな課題に気づくことができたりと充実した時間を送ることができました。今後の課題としては、自分が卒業までに取り組むことは決まっているのでそれをどれだけ深めることができるか、また狭い視点にならずほかの分野からも取り入れられることがあると思うので他のゼミ生の研究にも興味を示し学べる部分は学びたいと思います。

 亀谷 隼生  
地域経営学科 3回生 大月短期大学(山梨県)出身





地方都市は、市街地を一步離れると農林地の広がる田園地帯・農村である。こうした農村の自然・社会・文化の実態を調べ、なかでも農業の現状と課題を理解するために、ゼミ生各自の研究対象地に行く。対象地における基礎資料を取集・整理し、そこから生きた課題・問題を探り当て、現状の把握と分析を行い、解決への手掛かりを探る。

また、農村にはお祭りやその他多くの行事があり、現地調査の際にはそうした田舎の暮らしも体験しつつ、農業・農村・暮らしとは何かを深く考える。田舎や田舎暮らしの「よさ」・「新しい社会的価値」とは何かを感じ取ってもらう。

本「研究」では、これらを踏まえて、さらに深く理解、かつ明確にするために、文章におこし、研究の取りまとめを行う。

### 学生の気づき

来年の卒業論文を書くための調査や分析をしていく中で印象に残っているのは、どんな地域でもその地域の中で農業を引っ張っていく人には、必ず地域に対する問題意識と自分の仕事にける想いがあることを学びました。特に視察させていただいた鳥取県八頭町での取り組みは、その地域の問題を受け止め、自らで考えた方法でその問題を解決していく力を持っていて、農業の奥深さ、面白さを感じました。反省点は、提出物の期限を守れないことが多かったため、次年度への課題は「提出物の期限を守ること、そのための計画を立て確実に実行していくこと。」卒業論文についての反省は、調査・分析の範囲が総会資料の損益計算書にとどまっていたので、次年度への課題は「ヒアリング調査や実体験などのミクロ的視点・文献調査などで三和地域・京都府・日本を取り巻く環境から見るマクロ的視点の調査・分析に取り組むこと」「持続可能な農業経営を目指す視点から三和地域と大原野生産開発組合の関係性のあり方を考察すること」としたいです。

**上埜 妙子**  
地域経営学科 3年生 飯山高等学校(長野県)出身

1年間のゼミを振り返って学んだことは2つあります。1つ目は、自ら調査内容を決定し実行できたことです。1・2年生では先生の指示に従ってしか活動することができませんでしたが、3年生になって自分で問題意識を持って、行動することができるようになりました。自分で考えて行動することで、新たな発見や知識の深掘りに繋がりました。2つ目は、現地でのヒアリング調査で、気になった点を積極的に聞くことができるようになったことです。これまでは他人の目が気になって自分から質問することができませんでしたが、知りたいと思ったらすぐに行動に移すことができ、多くの情報を集められました。次年度への課題は、ヒアリング調査において回答しやすいような質問ができなかったことです。自分から積極的に質問はできたのですが、内容が不明確のまま質問してしまうことが多く、相手方に迷惑を掛けてしまいました。今後は相手方に伝わりやすいよう整理してから、質問していくようにしたいです。

**篠原 和真**  
地域経営学科 3年生 石動高等学校(富山県)出身

テーマとしている「オリーブ」について調べる中で、オリーブに関する知識も少しずつ身に付けており、由良オリーブを育てる会の方とも交流を深めることができている。収穫などの作業を通して、「農から生まれる交流」の可能性についても実感・体感しています。

ゼミのメンバーの調査や言動からは、自分の中でまだまだ足りない力が多くあると気付くことができます。自分にはなかった視点や疑問などを投げかけてもらえるため、より良い卒業論文の作成につなげることができます。

地域との関わりからは、地域におけるコミュニティの大切さを学んでいます。地域の様子を実際に自分の目で見て、感じて発見することは数多くあります。人と人が交流する姿を見て、コミュニケーションの取り方や関係性の築き方を学ぶこともできています。

今後の活動では、何事にも疑問を持ち、積極的に活動しながら、さらに地域のことを深く知っていきたいと思います。

**高原 望乃**  
地域経営学科 3年生 宮津高等学校(京都府)出身

#### 由良オリーブ園を軸とした地域の活性化 一人と人・人と地域・地域と地域という3つの視点からのアプローチ

【研究目的】 由良の活動である『由良の由良の由良』を軸に地域活性化のためのアプローチとして、由良オリーブ園の現状を踏まえ、オリーブ事業と『由良の由良の由良』との関係性を明らかにし、地域活性化の可能性を探る。

【方法】 現地調査を行い、由良オリーブ園の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業時間、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【対象】 由良オリーブ園の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

2) 地域活性化

調査項目	調査結果
由良オリーブ園の現状	由良オリーブ園の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。
地域活性化の可能性	由良オリーブ園の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【結論】 由良オリーブ園の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

#### 『富山県における農業振興の現状と今後の展望』 —小沢部町(下中(しもなか))オリーブ産地を事例として—

【研究目的】 富山県における農業振興の現状を把握し、今後の展望を明らかにする。

【方法】 現地調査を行い、小沢部町の農業振興の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【対象】 小沢部町の農業振興の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

2) 地域活性化

調査項目	調査結果
小沢部町の農業振興の現状	小沢部町の農業振興の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。
地域活性化の可能性	小沢部町の農業振興の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【結論】 小沢部町の農業振興の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

#### 大原野開発生産組合におけるぶどう経営現状と展望

【研究目的】 大原野開発生産組合におけるぶどう経営の現状を把握し、今後の展望を明らかにする。

【方法】 現地調査を行い、大原野開発生産組合のぶどう経営の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【対象】 大原野開発生産組合のぶどう経営の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

2) 地域活性化

調査項目	調査結果
大原野開発生産組合のぶどう経営の現状	大原野開発生産組合のぶどう経営の現状を把握し、過去のデータを整理し、さらに、『由良の由良の由良』でのオリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。
地域活性化の可能性	大原野開発生産組合のぶどう経営の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。

【結論】 大原野開発生産組合のぶどう経営の現状を踏まえ、オリーブの栽培と収穫、作業量、作業コストなどを調査し、地域活性化の可能性を探る。





地方公会計の仕組みについては、毎回教科書を輪読し、主に福知山市を事例として担当箇所をパワーポイント等で発表することで、公会計の理解とプレゼンテーション技術の修得を図った。  
また、ゼミ共通のテーマとして「グローバルに農業で活躍できるまち福知山」を設定し、福知山市役所をはじめとする専門家の協力により、内閣府地方創生推進室が主催する「地方創生★政策アイデア


コンテスト」に応募した。コンテストへの応募にあたり、地域課題の分析、資料作成、プレゼンテーション等の演習を行った。  
これらを通じて、財務情報および非財務情報の定量的・定性的分析によって地域の現状と課題を把握し、課題解決力の修得を図った。

### 学生の気づき

1番印象に残っていることはゼミ生で協力して政策アイデアコンテストに向けて資料をつくったことです。一から福知山の問題に向き合い、それを学生のアイデアと掛け合わせて新しいアイデアを生み出すのは思っていた以上に大変でした。実際の取り組みを農家さんにヒアリングしにいたり、写真を撮ったりしました。自分の知らなかった福知山をこのゼミを通して知ることができました。

また、会計の勉強のほうでは地方公会計の教科書をページごとに分かれて資料を作成し、自分の言葉で発表しました。自分がかみくみで他人に発表するのは緊張もするし、難しかったですが、理解が深まったし、資料の作成力やプレゼン力もいままでも身に付いたと思います。

次年度は卒論を作成するためにもっと資料を集める知識をつけておいたらよスムーズに進むと思います。昨年の反省をいかし、早めに卒論に取りかかり、卒論を満足のいくものに完成させたいです。

 小椋 真弥  
地域経営学科 3回生 小牧南高等学校(愛知県)出身

「地方創生★政策アイデアコンテスト」の決勝出場に向け、福知山市役所の職員方や株式会社seasonなどの福知山市周辺団体に協力していただき、その中でさまざまな調査の手法や分析の仕方を教えていただいたことが印象に残っています。そこから、数値の分析だけではなく、インタビューや実際に訪れるなど、たくさんの視点からの調査、分析が重要ということを知りました。実際のインタビュー調査や、福知山市役所との協力依頼の作業は、地域経営研究の担当教員である、井上直樹先生に全て任せてしまいました。本来は、私たちが主体的に動くべきだったと反省をしております。また、今年度は卒業論文に直結した調査や、勉強が十分にできていませんでした。次年度には、卒業論文を書く上でさらに、積極性や主体性、自主性が求められると考えています。文献を収集することや、さまざまな人に意見を聞くことなど一つ一つを、よりアクティブに行っていきます。

 高梨 春花  
地域経営学科 3回生 大田原女子高等学校(栃木県)出身







前期は、先進自治体の多文化共生策に関する文献の輪読をした。後期は前期の文献に記載のあった京丹後市をはじめ、舞鶴市、福知山市、京都府国際センターの取り組みについて調べ、予め質問項目等を検討した上で訪問、若しくは担当の方に来校頂き、それぞれ詳細をうかがった。また、京都では、観光地の多言語への対応(看板やパンフレットの多言語表記や多言語による放送など)を調査する

フィールドワークを行った。安全に関する文が複数言語に訳されていたことや自動販売機に日本円の支払い方法が絵で示されていたことなどの発見があった。その他、平和学習の一環として舞鶴引揚記念館、様々な文化を知るという観点から国立民族学博物館を訪れた。

学生の気づき

特に印象に残っているのは前期は舞鶴の引き上げ記念館見学、後期は国立民族学博物館の見学です。ゼミで行かなければ今後の人生で行くこともなかったと思いますし、知っていたことについてはさらに理解が深まり、知らなかったことについても認知ができてとても勉強になりました。反省点は前期に体調不良を起こしがちで欠席が多かった点です。今後は体調に気を付けます。

**河西 麻椰**  
地域経営学科 3回生 赤穂高等学校(兵庫県)出身

私が印象に残っていることは、京都府国際センターへ訪れたことです。京都府に在住している外国人の動向や国際センターの取り組みを初めて知り、技能実習生を中心に増加する外国人への対応を考えるきっかけとなりました。また、特に学びとなったことは、京丹後市役所へ訪問したことです。多文化共生事業の取り組みを職員の方から聞くことができ、地域に暮らす外国人と日本人の考え方を知ることができました。その中で、日本人の思い込みが外国人にとって差別に捉えられることを聞き、自分の考えが客観的に差別となっていないか言動を振り返るきっかけとなりました。反省点として課題発見や積極的な行動が継続できていないと感じました。フィールドワークや発表で疑問をうまくまとめることができず、積極的に質問ができなかったことがあります。次年度に向け、仮定を設定して気になる点や疑問点をまとめてから調査しようと思います。

**日高みのり**  
地域経営学科 3回生 五条高等学校(愛知県)出身

印象に残っていることは、舞鶴市に行き引揚記念館でテレビ局の取材があったこと。特に学びになったと思うことは、京都府国際センターを訪問して京都という、外国人観光客が多岐地域での活動や現在どのような状況なのかを詳しく知ることができたことである。反省点としては、卒業論文で何を書いたらいいのか全くわからないので、困っていることが挙げられる。来年度は課題の発見が必要だと考えている。

**古川七瀬**  
地域経営学科 3回生 武生東高等学校(福井県)出身

多文化共生のまちづくりの検討  
-日本人と外国人が共に暮らす地域のあり方-

河西麻椰、黒木美佳、佐藤彰仁、日高みのり、古川七瀬、渡辺瑞紀

大谷ゼミ(地域経営研究Ⅰ,Ⅱ)

文献による学習



- 活動内容
  - ・多文化共生のまちづくりに関する文献の輪読を行い、内容をよく理解した。
  - ・多文化共生のまちづくりに関する文献の輪読を行い、内容をよく理解した。
- 担当
  - ・第一著者 大谷 杏(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・第二著者 黒木美佳(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・第三著者 佐藤彰仁(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・第四著者 日高みのり(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)

福知山・舞鶴

- 福知山
  - ・福知山をまちづくり推進課の方から福知山の多文化共生事業などについて説明を受けた。
  - ・福知山観光ガイドの企画書からお話を聞いた。
  - ・大谷 杏の博物館訪問した。
- 舞鶴
  - ・舞鶴市観光協会を訪問し、シブリアに建設された古いホテルのお話を聞いた。そのホテルは下宿で宿泊した。
  - ・舞鶴市観光協会の方から舞鶴市の多文化共生事業、国際交流事業、さまざまな日本語などについて説明を受けた。

京丹後市役所への訪問

- 活動内容
  - ・京丹後市役所、観光課の方から「多文化共生のまちづくり」に関する取り組みについて説明を受けた。
  - ・京丹後市役所、観光課の方から「多文化共生のまちづくり」に関する取り組みについて説明を受けた。
- 担当
  - ・大谷 杏(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・黒木美佳(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・佐藤彰仁(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・日高みのり(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・古川七瀬(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・渡辺瑞紀(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)



京都府国際センターへの訪問

- 活動内容
  - ・京都府国際センターの方から「多文化共生のまちづくり」に関する取り組みについて説明を受けた。
  - ・京都府国際センターの方から「多文化共生のまちづくり」に関する取り組みについて説明を受けた。
- 担当
  - ・大谷 杏(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・黒木美佳(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・佐藤彰仁(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・日高みのり(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・古川七瀬(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)
  - ・渡辺瑞紀(地域経営研究Ⅰ・Ⅱ)



観光地の多文化・多言語調査(京都市)

- 【目的】京都市内における多文化・多言語対応の調査
- 【内容】伏見稲荷神社、御町橋、渡辺寺金堂、舞鶴山真光寺、世界遺産調査
- 外国人が多い観光地は多言語への取り組みが進んでいる。QRコードを使った観光案内、多言語の多言語案内、イラストを多用した案内
- 外国人に対してマナーに関する注意喚起も多く見られた。
- 観光地同士で対応に差がある

国立民族学博物館の見学(新大阪)

- 民族学博物館とは
- 国立民族学博物館は文化人類学・民俗学として1974年にその前身の大阪府立民族学研究所として創設された。もともとがこれまで収集してきた民族資料、モノの資料は現在、約54万5千点を数える。また、博物館の発展の上で、今般は世界最大の民族学博物館となっている。





社会や企業が求める最も必要な能力として「複雑な課題解決能力」が挙げられるが、この能力に必要なものとして思考法や経営学・マーケティングの知識をベースとした課題解決の手法がある。


本授業では、企業経営での課題解決に必要なことを学ぶために、経営学では一般的な学習法である「ケース・スタディ」を活用する。各企業のケース・スタディの輪読を行うことで経営学の知識を深め

ていく。また今後の就職活動を意識し、経済学・経営学・マーケティングの知識をもとにした企業の調査・分析を行うことで、卒業後意識し続けなければならない「仕事(ビジネス)」について考える機会とする。


### 学生の気づき

業界やテーマを決め、既存の論文や多くの事例からまずは業界や企業の現状を把握し、そのうえでどうしたらその業界や企業が成長できるのかについて研究しました。論文や事例を全て肯定するのではなく、あえて批判的な思考をもつことで、自分の思考の幅を広げることができ、より抜け目のない考えになるということを学びました。また、事例研究を通して業界や企業について学ぶことができました。

次年度は、より柔軟な考えをもち、いろんな考えができるようにしたいです。

 **中本 らいら**  
地域経営学科 3回生 倉吉東高等学校(鳥取県)出身

一年間のゼミを振り返ると、とても有意義なものだと思います。私達がしたことは、レポートや論文の要約で、レポートやパワポ等の資料作成や、要点を抑えるスキルが身につく内容だったと思います。このスキルは社会人になっても必要なスキルだと思うので、こういった実用的なゼミが増えれば良いと思います。ただ自分は要点を押さえて話すこと、何がしたいかを明確にして話せるようになりたいと思いました。

 **西川 和杜**  
地域経営学科 3回生 南宇和高等学校(愛媛県)出身

## 成熟市場での企業の回復要因

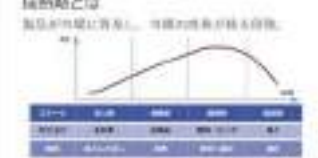
地域経営研究Ⅰ (高井、小山、中本、松本)

**問い**

成熟市場で企業が回復するための要因は何か？

**定義**

成熟市場とは  
製品が市場に普及し、市場の成長が鈍る状態。



**事例 1: 日本経済新聞社**



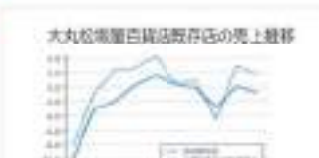
**事例 1: 日本経済新聞社の成功要因**

- デジタル化による収益拡大
- コンテンツ戦略の強化

**事例 2: 大丸松坂屋百貨店**



**事例 2: 大丸松坂屋百貨店の売上推移**



**事例 2: 大丸松坂屋百貨店の成功要因**

- 百貨店業への再参入
- デジタル化による収益拡大

**事例 3: ヤマハ株式会社**

**ピアノ生産台数推移**



**事例 3: ヤマハ株式会社の成功要因**

- ピアノ事業への再参入
- デジタル化による収益拡大

**YAMAHAの成功要因**

- デジタル化による収益拡大
- コンテンツ戦略の強化

**3事例の共通項**

**3企業の共通項**

- デジタル化による収益拡大
- コンテンツ戦略の強化

**まとめ**

**まとめ**

成熟市場での回復要因は、デジタル化による収益拡大とコンテンツ戦略の強化である。

**まとめ**

成熟市場での回復要因は、デジタル化による収益拡大とコンテンツ戦略の強化である。





コンセプトは商品開発、起業、まちづくりなど、ものごとの成功や価値の8割くらいを占める大事なもの。当ゼミでは大きく4点おこなう。①日本～世界事例、出身県事例、福知山事例を毎回個別調査・発表。すぐれたコンセプトとは何かを考察。②コンセプトメーカーになるためのコンセプトスクールを毎回実施。③企業や個人がコンセプトメーカーになるための問題集制作（「コンセプトゼミ～コンセプト

メーカーになるための問題集」。④福知山市役所シティプロモーションからの依頼で大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公・明智光秀公をテーマにした問題集「明智光秀×福知山IDEABOOK」を制作。冊子は福知山光秀ミュージアム訪問の子どもたちに手渡される。

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ 板倉仁夢・岩畑俊哉・大福暉嵐・小田恭兵・小林冠太・白岩朋夏・内藤和・目黒裕康・望月穂希・望月 葉・山元瑞吾・古朝優貴・塩見直紀

### テーマ：すぐれたコンセプトの研究と創造

●概要：  
コンセプトは商品開発、起業、まちづくりなど、ものごとの成功や価値の8割くらいを決める大事なもの。当ゼミでは大きく以下の5点をおこない、2つの成果物を生んだ。

- ①日本～世界事例、出身県事例、福知山の計4事例を毎回個別調査・発表。すぐれたコンセプトとは何かを考察。
- ②コンセプトメーカーになるためのコンセプトスクール（WS）を毎回実施、ならびに問題作成→**成果物**
- ③起業家、シティプロモーション担当者、コピーライター/クリエイティブディレクターをゲストに招き、仕事の思想など拜聴、意見交換。
- ④福知山市役所シティプロモーションからの依頼で問題集「明智光秀×福知山IDEABOOK」制作支援（2～3年ゼミ合同）→**成果物**
- ⑤各自の卒業研究テーマの探究と3度の発表

●成果物：  
A. コンセプトメーカーになるための問題集「コンセプトゼミ～コンセプトメーカーになるための問題集」制作。企業研修、授業、個人が起業やまちづくりなどのアイデア出しなどででの使用をイメージ。商業出版をめざす。  
B. 福知山市役所シティプロモーションからの依頼による明智光秀公をテーマにした問題集「明智光秀×福知山IDEABOOK」の制作支援。冊子は3月末以降、「福知山光秀ミュージアム」訪問の子どもたちに手渡され、子どもたちの回答は福知山のまちづくりに活かされる設計。問題集は本学情報学部1期生によってデジタル化される予定。

## 学生の気づき

この1年間のゼミ活動で、特に学びになったと思う事は、やはり「コンセプト」について深く知ることが出来たという点です。あらゆる物事に関してコンセプトが持つ役割というのはとても大きく、それを知っていると知らないとはかなりの差が生まれることになるという事を学びました。自分達でもコンセプトを作ってみたり、プロの方のお話を聞くことができたことは印象に残っています。

他にも、ゼミ内で早い段階から卒業研究のテーマを考える事ができ、3年の段階から卒業研究のテーマを作ることができました。次年度に向けての自分なりの課題としては、この1年間のゼミ活動を通じて設定した卒業研究のテーマを、その設定の通りに実行に移すことができるようにする事です。やりたいと思えるテーマを早いうちから見つけることができたので、それをいかに行動に移すことができるかがこれからの課題であり、その時にはゼミで学んだ「コンセプト」などを活かして卒業研究を行っていききたいと思っています。

岩畑 俊哉  
地域経営学科 3年生 星林高等学校(和歌山県)出身

1年間でコンセプトを軸としてゼミの研究を行っていましたが、その中で優れたコンセプトには万人受けするものがあるということに気づきました。そのことを応用して、アイデアブックというのを作成し、地元を持ち帰り地域の方にその地域を改めて知ってもらいたい機会となりました。クリエイティブな発想を就職活動等にも生かしていけたら良いと考えます。

学びとなった点については、コンセプトを追求することで、自分自身取り組みたいスポーツのあり方を感じることができました。地域とスポーツの掛け合わせをどう上手くしていくかが今後の鍵となると感じています。

反省として、ゼミ研究の材料がまだ薄い点が挙げられるので、今後、市とも連携して、福知山マラソンの課題などを考えていききたいと思っています。

大福 暉嵐  
地域経営学科 3年生 平田高等学校(島根県)出身

1年間のゼミを通して、言葉が人に与える影響力を改めて認識することができました。ゼミではコンセプトの事例を自分で調査してまとめたり、「コンセプトスクール問題集」の作成をおこないました。コンセプトについて調べていく過程では自分の持っている言葉をいかに組み合わせる新たな概念を作り出すことができるかがいいコンセプトを作る上で重要なのではないかと感じました。その言葉が誰かにとって響くのであれば、それはいいコンセプトになるということがわかりました。問題集作成ではこの冊子を見る人のことを考えた言葉選びに力を入れました。自分の伝えたいことが相手に届くようにするにはどうしたらいいのか、同じような意味でも受け取り方が全く違う言葉もあるので、言葉選びに苦労しました。人は目や耳で情報を受け取るが、そのすべては言葉から来ています。言葉の影響力を感じた上で、ゼミを通して言葉で誰かに情報や魅力を発信できるようになりたいと思うようになりました。

内藤 和  
地域経営学科 3年生 松江東高等学校(島根県)出身

塩見ゼミでは、コンセプトの研究を行いました。コンセプトを簡単に説明すると、「指針を明確にするための言葉」です。つまり、ただの概念にすぎず、それだけで何か劇的に変わるわけでもありません。しかし、多くの企業は当たり前のようにコンセプトを定めています。それはなぜか。私たちは、企業のコンセプトを集約し、その理由について議論を重ねました。そして導き出した答えが、「集団を良い方向へ導くことに役立つ」というシンプルなものでした。しかし、それを本当の意味で理解している企業は少ないです。反対に、このコンセプトの重要性を理解していた企業に共通したのが大企業でした。この結果から、一概念が組織にも多大な影響を及ぼし、有効な武器にもなり得ることがわかりました。そして、それは組織のみならず、個人にも当てはまります。私は本ゼミを通して、学問上でのコンセプトの知識、また私生活にも役立つ武器を同時に得ることができたと思います。

目黒 裕康  
地域経営学科 3年生 六日町高等学校(新潟県)出身





本演習は、文献輪読で理論を学びながら、フィールドワーク教育の実践として、府内の自治体・企業・NPO等と連携しながら、1人1リーダープロジェクトに取り組んだ。具体的には、①5大学インターゼミナール(合宿)、②舞鶴商店街創生、③高大社連携PBL(京都)、④高大社公金連携PBL(豊岡)、⑤京都から発信する政策研究交流大会(政策コンペ)、⑥全国大学まちづくり政策フォーラム(同)、⑦森の京


都観光プランコンテスト(同)、⑧SDGsコンテスト(同)に取り組んだ。2020年2月16日に南丹広域振興局で開催された2019年度森の京都観光プランコンテスト(主催:京都府南丹広域振興局)では、書類選考を通過し本選に出場。優秀賞を受賞した。

### 学生の気づき

ゼミの活動を振り返って印象に残っていることは、夏に開催した5大学合同のインゼミです。大学の垣根を超えてチームを作り、政策提言のための調査や政策立案を行いました。それぞれの大学の特色を融合しながら、オリジナルの政策提言をすることができました。

私はこのインゼミのまとめ役を務め、当日まで5大学と打ち合わせを行い、学生企画も考えました。顔を合わせない状態で打ち合わせをするのは少し大変でしたが、当日の運営を含め、最後までスムーズに行うことができたのでとても良い経験になりました。

参加した学生からも、違う大学で、違った学問を学んでいる人達が集まり、一緒に考え合うことで、今まで自分にはなかった価値観を得ることができたという感想も得られた一方で、スケジュールが過密だったという意見もあり、次年度の開催に活かしたいと感じました。

 西宮 瑠美  
地域経営学科 3年生 三次高等学校(広島県)出身

1人1プロジェクトリーダー制を採用している杉岡ゼミでは私は政策コンペのリーダーを担当しました。そこで、自身のプレゼンテーション能力や臨機応変に質問に対応する能力等の「伝える力」についてまだまだ足りていないことを痛感しました。そのため、時には企業の代表と時には高校生と協働して一つのプレゼンテーションを完成させることにより経験を積み重ねてきました。その経験が杉岡ゼミでの最も大きな収穫であったと感じています。ゼミ活動の中でメンバーと協力して1日中議論しプレゼンテーションの準備を進めたこともあり、そこから、仲間と協力してプロジェクトを遂行する力も身に着けることができたと感じています。政策コンペやその他のプロジェクトを通じて圧倒的な知識と経験、主体性を身に着けることができた杉岡ゼミでの時間は唯一無二のもので、加えて、この1年間で多くの方々にゼミ活動の協力をいただきました。その点を忘れることなく感謝の気持ちを持って今後も活動を継続していきたいと感じています。

 多川 隼  
地域経営学科 3年生 ECC国際外語専門学校(大阪府)出身

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(杉岡ゼミ)

## 「1人1プロジェクトリーダー制から学ぶ臨床政策ゼミ」

大橋 拓実・柏倉 悠人・黒熊 航平・後藤 英智・近藤 天音・  
多川 隼・西宮 瑠美・藤原 尚大(3年生)

**地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(杉岡ゼミ)**

- 「地方自治・商店街創生・まちづくり」セミナーに出席。
- 基礎的な知識と、自治体・企業・NPO等と連携して行う「1人1プロジェクトリーダー制」が特徴。
- フィールドワークは主に北近畿(とりわけ舞鶴・豊岡・福知山)を中心とした。
- その他、政策コンペに参加するほか、他大学との大学インターゼミにも参加し、積極的に交流を行った。

1

**舞鶴商店街創生プロジェクト**

舞鶴商店街(舞鶴市)への参画。参画のきっかけは舞鶴市の自治体職員との交流による。舞鶴市が主催する「舞鶴市まちづくりコンペ」に応募し、舞鶴市まちづくりコンペで最優秀賞を受賞した。

コンペで最優秀賞を受賞した。舞鶴市まちづくりコンペで最優秀賞を受賞した。舞鶴市まちづくりコンペで最優秀賞を受賞した。

2

**インゼミin福知山・舞鶴**

5大学(1府2県)合同のインゼミ。夏に開催された。5大学(1府2県)合同のインゼミ。夏に開催された。5大学(1府2県)合同のインゼミ。夏に開催された。

3

**高大社連携PBL事業①**

舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。

4

**高大社連携PBL事業②**

舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。

5

**京都から発信する政策研究交流大会12/15**

舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。舞鶴市まちづくりコンペ。

6



福知山公立大学  
The University of Fukuchiyama





本演習では、京都府内26市町村産業連関表の作成を試みた。きっかけは、「先行研究の北部7市町村の産業連関表のみで各自治体の特徴を浮き彫りにしたと言えるのか？」という疑問から始まっている。推計方法は、土居他(2019)にしたがった。しかし膨大な作業量のため、今年度は「市内生産額」の推計にとどまっている。府表の不明点は、京都府政策企画部企画統計課の方とのメールのやり取りにて理

解を深めていった。今後は、最終需要と移輸出・移輸入の按分処理に入る予定である。なお、京都産業大学経済学部寺崎ゼミとの研究交流(2019年12月14日(土)に本学にて報告会を開催)は、産業連関表の有用性を改めて知る良い機会となった。



### 学生の気づき

私たちは、京都府下26市町村すべての産業連関表の市内生産額までを作成しました。その過程で1番苦労した点は約2週間のゼミ合宿中に毎日10時間以上作業に没頭したこと。起床後すぐに作業を開始し、その日の作業が終了するのが、深夜になってしまう日もありました。そんな中でも無事やり遂げることができたのは、共に作業していたゼミメンバーの存在が大きかったです。毎日寝食を共に生活し、互いに励まし合いながら作業を行うことで乗り切ることができました。何より絆が深まりました。合宿の場を提供して下さった皆様には感謝の念に尽きません。

また、京都産業大学との共同ゼミにて、私たちが作成したすべての市町村の市内生産額を元に、各市町村の特徴について発表しました。私たちが行ってきたことが、すぐに成果として発表出来たこと、また京都産業大学のゼミとの意見交換の際には、1年間ゼミで学んだ、経済学の観点から意見交換ができたので、自信となりました。

産業連関表はその地域の産業構造が分かるので、今後は自分の出身地である名古屋市の基幹産業は自動車産業なので、それがどのように数値に表れるのかを調べたいです。

市内生産額の計算に取り組んだ当初は、各市町村の具体的な数値を知らず、漠然と京都市が一番大きくなるのだろうかとか考えていませんでした。しかし、計算を進めていくうちに、市町村によっては生産額が0の産業があることや、26市町村全体で比較した時に、京都市の生産額が非常に大きく、2番目に大きい宇治市の9倍になることが実際の数値で分かりました。市内生産額を算出するには、多くの手順を踏まなければなりませんでした。その中でも私が一番苦労した点は、経済センサスと産業連関表の部門分類を対応させる作業です。元データである経済センサスの部門分類は産業連関表とは異なる部分があり、手作業で入力するのですが、何十回やり直しても部門の数が合いませんでした。最終的に他のゼミメンバーに10時間に及ぶ作業をさせてしまい慚愧の念に堪えません。他にも様々な苦労がありましたが、今回の研究では、同じ作業を全員で行うことにより、仲間意識が深まったので大変有意義な時間でした。

産業連関表については、マクロ経済学で簡単にしか習っていなかったため、産業連関表がここまで複雑な統計表で、手間のかかる作業をしなければならぬとは思っていませんでした。

実際の作業では、必要な数値を別の統計表から引っ張ってくるのを、間違えないように、気を遣ったので、とても疲れました。気の遠くなる作業を終えたあと、最終的に市内生産額を算出し、Wチェックを行いました。ミスのあるところを順に直していく作業が、加えて大変でした。

また、京都府26市町村の市内生産額と特化係数から、京都府内での経済格差が生じているのがわかりました。特に、京都市を含めた、京都府南部は、商業が、京都府北部は、第1次産業や製造業が強いというふうで、北部と南部で産業の違いが大きく出たのは、驚きでした。今回の作業にあたり、2週間近く合宿としてお世話になった、辻家の皆さまには感謝しています。

1年間のゼミ活動を通じて、産業連関表の必要性や加工統計を作る難しさを学ぶことができました。

総務省が作成している産業連関表を、ゼミでは市町村単位で京都府下26市町村作成しましたが、市内生産額を出すまでに苦労したことがたくさんありました。元データのいらぬ部分を削除して使用できるデータに直すところは、間違えて消さなければいけないところを消していなかったり、消さなくてもよいところを消してしまったりと、序盤の作業でつまづいてしまったためからの作業でズレが生じてしまい、作業がスムーズにいきませんでした。また、同じ市町村を担当している人と計算した数値が合っているかどうかダブルチェックをおこなったときは数字が大きいところほど、2人の出した数値に差が生じてしまいました。何が間違っているのか、どこで間違ったのかを一から確認していく作業は終わりが見えずとても苦労しました。複雑で細かい作業であったため、作業の途中で終わることができず、区切りのつくところまでは集中して行わなければいけませんでした。しかし、このような大変な作業を乗り越えることができたのは夏休み中にゼミで1週間合宿を行い、全員で同じ作業をして、大変さを共有することができたからです。また、ゼミ生だけでなく、この合宿を支えてくれた方々のおかげもあり、作り上げることができました。自分たちが出した数字をもとに、26市町村の特徴をつかむことができたため、大変だった作業を無駄にしないよう、次の研究へとつなげていきたいです。

高木 寛斗  
地域経営学科 3年生 天白高等学校(愛知県)出身

宮西 紘典  
地域経営学科 3年生 清真学園高等学校(茨城県)出身

古賀 琢己  
地域経営学科 3年生 大村高等学校(長崎県)出身

近藤 亜紗  
地域経営学科 3年生 大垣西高等学校(岐阜県)出身





本演習では、卒業研究の準備段階として調査研究の基礎を学ぶことを目的に、履修者による共同研究を行った。前期には文献調査を実施し、文献リストの作り方、文献のまとめ方等について学習しながら、高校の探究学習における現状の課題を整理した。後期には、前期に整理した課題に対応するための教育課程案について検討し、その内容について研究発表を行った。この後、共同研究として行ったプ

ロセスを参考にしつつ、個々人の卒業論文テーマについて検討をはじめ、それぞれが次年度の卒業論文執筆に向けた研究計画を作成した。



## 学生の気づき

学びになったと思う事は、教育に関する基礎知識だけでなく、レポートや卒業論文を書く上での資料の集め方やどのような構成で内容を深めていくのか、政策交流大会のポスター発表を通して、理解できたことです。ドローンや360度カメラなどの先端技術と教育を一緒に学ぶことができ、教育以外のIT業界にも興味を持つきっかけとなりました。また、それらの技術を教育の現場で利用するためにはまだ課題が残っており、主体的・対話的な教育をよりよくするための考察もグループワークで行えたことが印象に残っています。グループでの研究は終わりましたが、個人の卒業研究に関しては、まだテーマやその研究目的、調査方法をまだ確定できていない状況なので、次年度はそれらをより研究しやすいように考察していき、就活が落ち着いた頃には、グループワークで学んだことを活かして、実際の調査や論文制作を行っていくことが課題となっています。

竹林 昇吾  
地域経営学科 3回生 三国高等学校(福井県)出身

新学習指導要領についての理解を深め、新たなプログラムについて考えたことが印象に残っています。自分たちが今までどのようなカリキュラムの中で学習を行い、現在の学びにおいて何が重要視されているのかがわかりました。コンペの発表に向けた資料作りを行い、さらに学びが深まったと思います。また探究学習について考える際、利用教材としてドローンを活用する提案の中で、実際に触れたことが印象深いです。改めて実際に触れることでわかることが多くあるとわかりました。

調べるあたり、資料を読み込む量が少なく感じました。多くの資料を読み込むことができていたら、さらに良い意見が出ていたかもしれません。今後卒業論も本格化していく中でより多くの情報を集めることが必要となってきます。次年度は卒論、文献など、より多くの資料に目を向けていきたいです。

岡本 怜大  
地域経営学科 3回生 三木高等学校(兵庫県)出身

私は「京都から発信する政策研究交流大会」におけるパネル発表の体験が特に印象に残っています。この体験は、作成時には、卒業論文時に必要になる文章作成能力や、先行研究を探し、要点をまとめる能力を伸ばす体験とし、発表時には、限られた時間の中で要点を伝えるという重要性を、肌を通して学ぶことができました。反省点としては、発表準備時に発表者は決まっていたものの、発表者以外の人も解説できる程度の理解をさせることができなかったところ、また、質疑応答の際に、相手の納得できる回答を返すことができなかったところ。次年度に向けた自分なりの課題としては、上記の反省点の改善に加え、卒業論文の方向性を決め、自分が納得できる内容に仕上げていきたいと思うところです。また、このような発表の機会を設けてもらった時は、反省点を改め、評価を受けることができる内容に仕上げていきたいと思いました。

小澤 遼太郎  
地域経営学科 3回生 館林高等学校(群馬県)出身

印象に残ったのは、12月に京都市内で行われた政策発表大会に参加したことです。あのような会に参加したことはありませんでしたし、複数人で制作物を作るのも初めてでした。他大学の方の考え方や姿勢など勉強になる部分が多かったです。その時に気づいたのは、自分は勉強不足だったという点です。自分の専門的な分野だったこともあると思いますが、教授との会話の内容についていけない自分がいました。様々な知識を得ないといけないと思いました。反省すべき点は、先生に頼りすぎてしまっていた点です。発表会までに時間がなかったというのがありますが、もう少し主体性を出して参加すべきだったと思いました。社会人になるにあたり、この主体性を補うことが次年度の目標や課題だと思います。

高田 悠太  
地域経営学科 3回生 館林高等学校(群馬県)出身





本演習は、研究のデザインとプロセスを理解し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定とその実施が目的であった。一年を通して、各学生は、観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析を行った。

また、個人研究とあわせて、海の京都観光圏における課題をテーマにしたプロジェクトを2つ企画し、それぞれに取り組んだ。一つは、

京都舞鶴港でのクルーズ船客を対象にした調査票調査で、収集した調査票データを集計・分析した。もう一つは、伊根町のお土産づくりプロジェクトで、伊根中学校の生徒と一緒に、インバウンド観光者向けのお土産のアイデアを生み出した。

### 学生の気づき

私が学生時代に最も打ち込んだのはゼミの活動です。私の所属するゼミでは観光に関することを研究しています。そこで行われたプロジェクトで伊根町の新しいお土産案を考えることになりました。私が初めて伊根町の土産物屋を訪れたのは夏でした。日差しが強く、時折雨も降りました。しかし、土産物屋には傘やレインコートなどの雨具は販売していませんでした。そこで私は傘をお土産の案として考えました。伊根町は伊根の舟屋とも言われる海に面した木造の家が立ち並ぶ風景が有名で、その風景をビニール傘の縁に描いて試作品を作りました。現在はその試作品を見た土産物屋の方から傘を納品して欲しいという話を頂き、商品化に向けて行動しています。

**内田 舞**  
地域経営学科 3回生 伊東高等学校(静岡県)出身

1年間ゼミに所属し、クルーズ船利用者の舞鶴の観光の動向について調査を行いました。自分たちで現地での調査票の配布からデータの収集、データのまとめ作業まで行い、最終的に舞鶴市への報告まで出来たので、非常に有意義な活動を行うことが出来ました。ゼミを通して、初めてクルーズ船のことや舞鶴市の観光についての基礎知識を得ることが出来ました。また、舞鶴市の方が、実際に自分たちが感じていたことが目に見えた形になっていた、と話して下さったことが、自分たちの調査の方向性や結果は間違っていないと思うことが出来て、とても印象に残っています。次年度は自分たちが調査を行ってからまだ知りたいことや、舞鶴市からのフィードバックを参考にして、更に深掘した調査を行いたいです。

**高木 麻衣**  
地域経営学科 3回生 倉敷古城池高等学校(岡山県)出身

#### 19年度 舞鶴市クルーズ船 観光動態調査 発表

【調査目的】  
本調査の目的は、本学と舞鶴市が連携し、舞鶴観光圏に寄与するクルーズ船客の増加を促すための実証サービスに資することを目的とする。

【調査対象】  
京都府舞鶴市を定着クルーズするコスト社のコスト・ネオロマンティカに乗り、舞鶴に一時下船したクルーズ客(注)にアンケートを実施する。

【調査内容】  
本調査の調査項目は、フェースシート項目(年代・居住地域・訪問回数等)、訪問回数、乗船の理由、訪問先の満足度、観光情報の入手経路、観光情報提供手段、自由記述意見を扱う内容。

【調査実施日】  
2018年度:2018年7月15日(日) 2018年8月13日(日)  
2019年度:2019年7月14日(日) 2019年8月11日(日)

【調査票回収状況】  
総数:配布121通・回収138通・回収率56.3%  
2018年度:配布84通・回収45通・回収率53.4%  
2019年度:配布104通・回収93通・回収率89.4%  
※QRコードでの調査も実施。回収総計33通で、回収率18%未満。

#### 自由記述欄

【F1A】  
\*案内の受け付けに当たっての対応、乗船前に申し込んでいたのが好評でした。  
\*この地区の景観を改めて、大層と褒めてください。  
\*人数が多いので、乗船予定日なども大変賑やかな環境になってくれるのが嬉しいです。

【F1A2】  
\*乗船の時間が短いので、乗船の楽しさをもう少し長くしてほしいです。  
\*乗船の楽しさをもう少し長くしてほしいです。  
\*乗船の楽しさをもう少し長くしてほしいです。

#### 今後の課題

- \*下船した人全員がアンケートする(全体の数の向上)
- \*どれくらいの方が乗船後にアンケートするのかが課題
- \*乗船の理由を詳しく質問を希望(訪れる目的の違い)
- \*質問内容に改善を加える(調査票、質問項目などの追加)

#### 伊根町の新しいお土産を考えよう PART 1

～お土産のアイデア～

#### 伊根町に訪れる訪日外国人ランキング

- 1位 台湾
- 2位 香港
- 3位 中国

→アジアからの観光客が多い

H30年観光庁「外国人宿泊客数」

#### 伊根町のお土産って何があるか知ってる?

伊根町のお土産

伊根町のお土産

#### 実際に見に行ってみよう!!

実際に見に行ってみよう!!



# 卒論執筆のための 研究手順の把握とテーマの設定

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 張 明軍



地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(3回生)

本演習は4年次卒業論文の執筆に向けて、各自の研究テーマを確定するために、既往研究の論文や参考書等のレビュー、輪読、報告発表を実施した。「農村地域における電子決済」、「アートによる地域づくりの日中比較」、「地域に住む外国人市民向けの情報発信のあり方」等のテーマを決め、価値のある研究成果を目指して、方法的、独自性や実施手法などを確認できた。また、引き続き、中国語学習の一

環として、「HSK(中国語能力試験)の受験」や「美山かやぶきの里における中国語実践モニターツアー」等を実施した。一年間を通して、それぞれ、豊富な成果を得られた。

## 学生の気づき

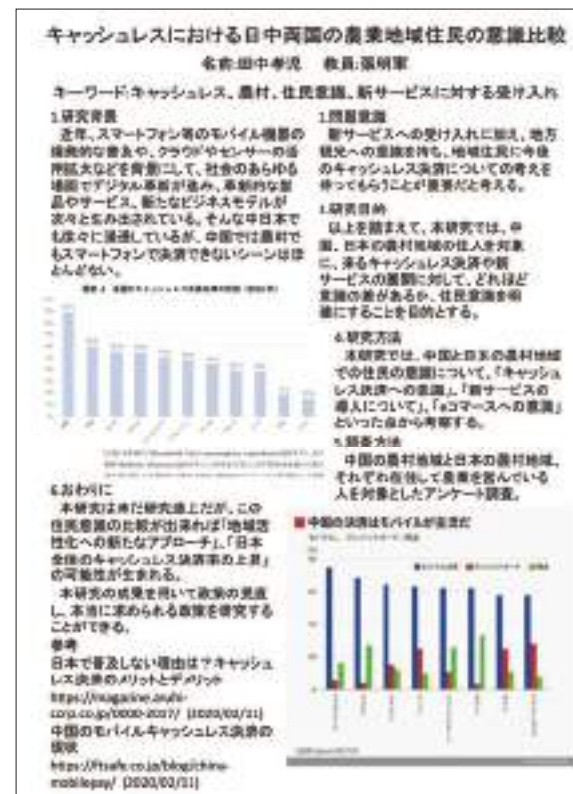
ゼミを振り返って、大きく成長出来たと感じることは視野の広がります。誰かの研究対象にスポットを当てて、全員で感じたことや疑問に思ったことを突き詰める形式は、自分の知識不足や見識の甘さ、また他のゼミメンバーの理解や柔軟な思考を気付かせてくれました。中国に少し興味があるから、という安直な理由でゼミを選んだこともあって新しい知識や表面上しか理解していなかったものが多く、日本との文化や歴史、環境等の違いをじっくりと知

ることが出来たのも大きな収穫だと思います。また、発表資料を制作する際に論文の要約をしたり、質問を想像してある程度解答を用意したりと考えることが多く、ついていけるか最初は不安でしたが、最終的に主な卒業研究の対象やテーマがほぼ定まり、内容を深めていく段階までいけたのでこのベースを崩さず、完成に向けて努力したいと思います。

田中 孝児 | 地域経営学科 3回生 浜松日体高等学校(静岡県)出身



地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(3回生)





# データウェアハウスゼミ (データウェアハウス構築技術の習得と地域分析)

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 岡本 悦司




2年生の地域経営演習では、教官が病院データをデータウェアハウスに加工して提供したが、本ゼミでは学生が任意に選択した公開データ(必ずしも医療データに限定しない)について自らデータウェアハウス化を行う技術を習得する。データウェアハウスとは、Excel上でピボットテーブルで操作できる形態であり、ネット上で公開された夥しい統計表の大半はそのままでは操作できない。膨大なデータを

ネット(e-stat等)からダウンロードし、それをキューブ形式に加工することは一定の技術が必要とするが本ゼミはそうした技術をマスターしたデータウェアハウザー育成を目指す。


## 学生の気づき

データの加工について知識が乏しく、何度も教えていただきながら学んでいきました。データ加工の技術や心得について学び、最初に比べ技術・知識が身に付いたと実感しています。データを加工するのに時間が掛かっているため、素早く的確にできるよう練習していきたいです。

 **山藤 彩香**  
医療福祉経営学科 3回生 江津高等学校(島根県)出身

私は、データウェアハウスゼミに所属しており、e-statで公表された統計調査データを加工しデータウェアハウス化することで膨大なデータを今後の医学研究につながる活動を行いました。

現在日本の医療水準は高くなり、世界トップクラス長寿国を誇る日本では高齢者の医療需要は年々高まっています。また少子高齢化が顕著に進行しているため医療費・介護費などの社会保障費が増加しています。そこで私は後期高齢者の医療費に着目し、厚生労働省が行っている診療報酬明細書及び調剤報酬明細書を元に受診状況を様々な項目で表した全数調査である「医療給付実態調査」を元に疾病分類名、年齢、データ型、DATA、保険種別、被保険者種別、性と6つの項目から医療費を表し、少子高齢化である日本の今後の医療費負担について考察しました。これらをデータウェアハウス化し、社会情勢や制度などによる関連性を探索するデータマイニングを行うことで独自の分析、知見を得ることができました。

 **塩崎 万里奈**  
医療福祉経営学科 3回生 高田高等学校(新潟県)出身

**1. DWHとは**

- DWHは「データウェアハウス (Data Warehouse)」の略で、ウェアハウスは倉庫のことである。データウェアハウスとはさまざまな種類のデータを集約して大規模の情報を一元管理し、分析するためのデータベースである。データウェアハウスの構築には、データの抽出、変換、ロード (ETL) が必要となる。データウェアハウスの構築には、データの抽出、変換、ロード (ETL) が必要となる。
- データウェアハウスの構築には、データの抽出、変換、ロード (ETL) が必要となる。データウェアハウスの構築には、データの抽出、変換、ロード (ETL) が必要となる。

**ゼミ概要**

- このゼミではe-statのデータを加工し、ピボットテーブルをつくる技術を学びました。そしてそのデータから様々な情報を抜き出しました。

**家計調査**

家計調査とは、一定の世帯に毎月行われる家計調査で、世帯の収入、支出、貯蓄、負債などの家計状況を把握することによって行われる。

**医療給付実態調査**

医療給付実態調査とは、診療報酬明細書及び調剤報酬明細書を元に受診状況を様々な視点で考察した全数調査である。

**国勢調査人口基本統計**

国籍、男女別外国人人口

国勢調査とは、我が国に暮らしているすべての人口を把握するための調査である。2017年と2020年の国勢調査人口基本統計を比較し、外国人人口の増加傾向を確認した。

2017年と2020年の国勢調査人口基本統計を比較し、外国人人口の増加傾向を確認した。

外国人人口の増加傾向を確認した。



# わが国の乳幼児突然死症候群(SIDS)の疫学とその正確な実態把握について

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 垣内 康宏



本研究では、主にわが国の乳幼児突然死症候群(SIDS)の疫学とその正確な実態把握について分析を行った。具体的には、近年SIDSは減少傾向にあるとされているものの、一方で乳幼児の不詳の死が増加していることから、本来はSIDSに含まれるはずの症例が不詳の死に含まれている可能性を、死因統計等を分析することによって検証した。分析の結果、不詳の死とされた症例の中には、本来SIDSと

診断されるべきものが一定数含まれていることが明らかとなった。厚生労働省は2020年4月から、子どもの全死亡例につき、その死因を網羅的に検証する「チャイルド・デス・レビュー」制度のモデル事業を開始する予定であり、今後はSIDS以外の死因についても分析を進める予定である。

## 学生の気づき

今年度のゼミでは、前期は卒業論文のテーマ設定を行うにあたって情報収集などを行いました。後期は、診療情報管理士の資格取得に向けて特に基礎分野をみんなで勉強しました。忘れていることが多く、覚えなおすことがとても大変でした。一年間を通して、医療に関わる知識を多く身につけることができました。前期に行った卒業論文のテーマ設定では、現状医療ではどのような課題があるのか、興味のある分野から選びました。その際、知らなかった課題や病名が多かったので勉強不足を痛感しました。私は在宅医療と孤独死をテーマに論文を書きたいと考えています。来年のゼミでは、まだ大枠しか決まっていないので、今年培った知識をもとに卒業論文作成に取り組みたいと思います。

五十嵐 彩夏  
医療福祉経営学科 3年生 北海道札幌啓成高等学校(北海道)出身

前期は、SIDS(乳幼児突然死亡症候群)について勉強しました。まずは、SIDSの概要を学び、その後、国のデータ、横浜市のデータを比較したりしました。SIDSは、国の発表データによると、年々減少しているように見えます。本当に減少していると言えるのか確かめるために、横浜市のデータを利用しました。横浜市のデータをよく見ると、「不詳の死」が増えています。SIDSは、死亡解剖しないと、この名前がつけられません。死亡解剖をしていないことにより、「不詳の死」に分類されているのではないかと考えられました。このことより、SIDSは減ったのではなく、「不詳の死」にカウントされている可能性があるといえます。ここでのゼミでは、データを比較することにより、別の新しい情報を得られることが分かりました。後期は、診療情報管理士の勉強を重視していました。今後も、知識を増やしていきたいです。

岩瀬 綾花  
医療福祉経営学科 3年生 西尾東高等学校(愛知県)出身

～地域経営研究Ⅰ・Ⅱ～

### わが国の乳幼児突然死症候群(SIDS)の疫学とその正確な実態把握について

福和山公立大学地域経営学部医療福祉経営学科  
五十嵐 彩夏 岩瀬 綾花 榎 由真  
垣内 康宏(指導教員)

#### SIDSの発生数は年々減少傾向にある

(注: 国勢調査データ中心)

#### 都道府県別の全乳児死亡に占めるSIDSの割合(%)の推移

1997年 → 2017年

(人口動態統計に基づいた推定)

#### 都道府県別の全乳児死亡に占める「その他全ての疾患(B+45)」の割合(%)の推移

1997年 → 2017年

(人口動態統計に基づいた推定)

#### 都道府県別の全乳児死亡に占めるSIDS及び「その他全ての疾患(B+45)」の割合の相関

(2007年,  $r = -0.512$ )

(人口動態統計に基づいた推定)

#### 和歌山県の直近5年間のSIDS及び「その他全ての疾患(B+45)」の割合(2013-2017)

年	その他疾患(%)	SIDS(%)
2017	16.7	0.0
2016	33.3	0.0
2015	7.7	0.0
2014	50.0	0.0
2013	40.0	0.0

(人口動態統計に基づいた推定)

#### 直近5年間のその他全ての疾患上位10県(2013-2017)

順位	2017	2016	2015	2014	2013
1	岩手県	宮城県	秋田県	福島県	山形県
2	北海道	和歌山県	徳島県	高知県	香川県
3	佐賀県	福井県	新潟県	山梨県	長野県
4	青森県	宮城県	福島県	山形県	秋田県
5	福井県	新潟県	山梨県	長野県	静岡県
6	山形県	秋田県	福島県	山形県	秋田県
7	秋田県	山形県	福島県	山形県	秋田県
8	山形県	秋田県	福島県	山形県	秋田県
9	秋田県	山形県	福島県	山形県	秋田県
10	山形県	秋田県	福島県	山形県	秋田県

(人口動態統計に基づいた推定)

#### まとめ

- SIDSは統計上は減少傾向にあるように見えるものの、一方で不詳の死が含まれる「その他全ての疾患」が反比例して増加傾向にある。
- 「その他全ての疾患」の中に、本来SIDSと死因診断されるべきケースが含まれていないか、改めて精査する必要がある。





昨年度後期の演習で収集したデータを分析し、その結果を第78回日本公衆衛生学会総会(高知)の一般口演で発表した。内容は、福知山市在住の前期高齢者(65歳以上75歳未満)の医療と健康を対象とした調査研究である。具体的には、市内4中学校区の該当住民を無作為抽出し、質問紙を送付、回収したデータを用いた。その結果、運動への態度などに、中学校区間で有意差があることを明らかにした。

学生は、本演習を通して、データの分析法を学んだ。また、得られた結果を学会で発表するほか、ご協力いただいた福知山市の担当部署へ報告する機会を得て、研究結果のまとめ方を習得した。

### 学生の気づき

私のゼミは、2回生から調査していた「高齢者の健康と医療に関する研究」を引き続きしていました。約1年半かけて、アンケートの作成、分析と報告書の作成を行いました。この研究は、公衆衛生学会総会の口頭発表に採択され、昨年10月に発表しました。

今回の研究をしている中で、特に「分析」が一番苦労しました。私は、2回生の時までに社会調査論を取っていなかったため、調査の仕方、アンケート用紙の作成の仕方、分析方法が何一つわかりませんでした。しかし、研究していく中で少しずつわかるようになりました。わかりだしてからは、自分が調べたいことを調べる最短ルートを考え、効率よく調査していくことができるようになりました。

私は、改めて「学習」の大切さを知ることが出来ました。知識が増えると、今まで出来なかったことができるようになります。また、たくさんの視点から物事を見られるようになり、効率も良くなりました。

来年度は、今回の研究をさらに深掘りし、卒業論文を書くと思っています。今よりもっと知識を身につけ、自分が納得出来るものを作りたいと思います。

**芝田 怜奈**  
医療福祉経営学科3回生 桐蔭高等学校(和歌山県)出身

この1年間で印象に残っていることは、2年のゼミで行った調査結果を報告書にまとめたことです。私は、調査の中でも高齢者の通院行動に着目し、データ分析を行い、結果をまとめました。その中で、福知山市の高齢者は、全国調査と比べると、かかりつけ医を持っている人が少ない傾向が見られました。

この結果を踏まえ文章を書く時、上手く書けず、悔しい思いをしました。かかりつけ医について調べていくうちに、かかりつけ医の重要性の他に、地域医療の様々な問題点に気付く事ができました。自分が持っている視点で書こうとばかりしていましたが、他の先行研究を調べる事で、違った視点を持つ事ができました。

今後は、普段から問題意識を持ち、物事を深く考えて、理解するようにしていきたいと思っています。理解を深めることで、相手に伝わる文章が書けるようになると痛感したので、努力していきたいです。

**橋爪 朋美**  
医療福祉経営学科3回生 武生東高等学校(福井県)出身

2年生の前期からの研究を引き継ぎ、活動を行いました。活動の内容は、活動報告会と公衆衛生学会での発表へ向けての資料の作成と発表、市役所への報告書作成です。

ゼミの活動の中で、発表の機会が2度ありました。活動報告会では、市民の方々が参加されるとのことで、市民の方にわかりやすい発表資料になるように努めました。公衆衛生学会では、言葉の扱い方や説明の仕方などを学びました。それぞれ気をつけることが違い、とても良い経験になりました。

また、本研究で協力していただいた、福知山市役所に報告書を提出しました。報告書の作成は、初めての経験でした。書き方や図表の示し方を調べたり、佐藤先生にご指導いただいたりして、しっかりとした報告書を作成できたのではないかと思います。

アンケートの回答をデータにする際、自由記載の回答の打ち込みに苦労したので、分析しやすい質問項目にすることが重要だと感じました。

**本間 陽子**  
医療福祉経営学科3回生 村上高等学校(新潟県)出身

## 一自治体内で観測された住民の健康意識の地域差

福知山公立大学地域経営学部医療福祉経営学科  
芝田 怜奈 橋爪 朋美 本間 陽子 佐藤 恵

### 抜粋



・大江地区では、現在運動をしていない人の割合は、31%であった。  
・地域間で有意差あり(p<0.05)。

**背景**  
我が国の課題の一つに健康寿命の延伸がある。そのためには、「個人の健康への意識」の醸成が重要である。多くの自治体で啓発活動が行われている。  
前代らの先行研究では、ワタチン族種中に、同一市内で地域差が観測された。この地域差は、個人の健康への意識を窺にもられるかもしれない。  
健康への意識に差異があるならば、施策立案の段階でそれらを勘案する必要がある。

**考察**  
・運動状況、運動への意識、日常生活への健康に関する影響の有無に、地域で有意な差が抽出された  
・健康への意識全般に地域差があると想定される  
・現在の市単位ではなく、より狭い地域単位での計画立案により、住民への健康政策を、より効率的に伝達できる可能性が考えられる  
・原因が明らかになれば、これら差異を解消する手法開発に役立てられるかもしれない

**目的**  
一つの自治体の中でも、さらに小さな地区によって、住民の健康への意識が異なることを検証する。

**結論**  
一市内で、健康意識に差が見られるか検証したところ、運動意欲に有意な差があることが明らかになった。  
地域差が生じる原因を明らかにすることが今後の課題である。



### 地域の映像データ取得作業を通じた情報活用能力を育成する授業案の構築

江崎 公貴 | 地域経営学科 4回生 杏和高等学校(愛知県)出身  
小林 計介 | 地域経営学科 4回生 島田樟誠高等学校(静岡県)出身

本研究では、学校と地域の連携がさらに注目を浴びようになっている現状、また、学習指導要領の改訂にともない情報活用能力の育成が重要視されていることに着目し、「地域を題材とした情報活用能力を育成する教育課程」について検討を行った。それにあたり、文献調査、アンケート調査、インタビュー調査から地域探究学習の

菊池 迪央 | 地域経営学科 4回生 水沢高等学校(岩手県)出身  
田村 怜也 | 地域経営学科 4回生 八鹿高等学校(兵庫県)出身

課題について整理し、その課題を克服する案としてドローンを活用した探究学習の方法について検討した。教育課程案について、内容としての魅力は十分に備えつつも、新しい機材を有効に活用する組織的な研究体制・人材育成に課題が残るといえる。

### 大河ドラマ放送による地域活性と観光ガイド-福知山市を事例に-

小谷 大喜 | 地域経営学科 4回生 村岡高等学校(兵庫県)出身

本論文は、「大河ドラマ」を契機とした観光振興について、地域住民の視点が不足していることを解決するため、地域住民のガイドツアーによりリピーターが増えて持続可能な観光誘致となるか、今後の在り方を検討した。そのうえで、先行研究のコンテンツツーリズムの議論を深めると共に、他地域の先行事例を比較し、福知山市を校

討していくものとした。

本研究の結果、福知山市には一人に対して丁寧なガイドツアーの仕組みは存在しているが、観光客数が多くなった場合に対して一人一人に対応できていない現状が明らかとなった。

### 大学生の海外旅行実態の分析と類型化

平野 沙知 | 地域経営学科 4回生 新宮高等学校(和歌山県)出身

本稿は、旅行に対する意識と余暇時間の過ごし方についての観点から大学生の海外旅行実態を分析し類型化することで、観光政策における若者の海外旅行促進に向けた効果的な方策を検討することを目的とした。京都府内の大学生を対象に余暇時間と海外旅行に関する意識を聞き取る調査票調査を行い、直近の海外旅行の実施時期

と過去の海外旅行の実施意向に基づき、大学生を“積極的参加者”、“参加者”、“消極的希望派”、“否定派”の4つのタイプに類型化した。

今後、若者の海外旅行離れに関する議論において、海外旅行における経験や意識の違いを認識し、海外旅行促進のためのアプローチを検討することが重要であると考えられる。

### コンテンツツーリズムと地域振興 -舞鶴における「艦これ」コンテンツの可能性と展望-

浦生 健一郎 | 地域経営学科 4回生 一宮興道高等学校(愛知県)出身

本論文では、著名なコンテンツツーリズムの成功例を交えつつ、艦隊これくしょんという旧海軍を題材としたブラウザゲームと、旧海軍と関係性の深い京都府舞鶴市というふたつの要素を掛け合わせ、筆者が所属するゼミが継続調査を行ったアンケートやイベント主催

者に行ったヒアリング調査の結果などを交えてコンテンツツーリズムの可能性と展望を考察した。同時に、単一のコンテンツによって発生するオーバーツーリズムと、その対策となる新たな観光の形を模索した。

### 災害時における地方議会、議員の在り方 ～西日本豪雨災害から見る倉敷市議会の果たすべき役割～

狩山 紘一 | 地域経営学科 4回生 笠岡高等学校(岡山県)出身

本論文では、地方議会及び議員の災害時における対応や役割を整理し、市議会及び市議会議員の災害時におけるマニュアル等の必要性について論じた。具体的には西日本豪雨災害で被災した倉敷市を

事例に、議会及び議会議員の災害対応に対する在り方について現状分析を行い、議会独自の災害対応マニュアル及びBCPを作成することの必要性について考察をした。

### 災害多発地域における非住民の防災の在り方 ～福知山市内における高校を事例として防災の現状と課題～

古泉 伊織 | 地域経営学科 4回生 久美浜高等学校(京都府)出身

本論文では、福知山市の6校の高校が行っている防災活動の現状と課題を明らかにし、近隣市町から通学している学生への防災の在り方を提言した。近年の日本は自然災害により被害が多く発生しており、災害対策により一層力を入れる必要がある。福知山市は、水害の町と言われてるだけあり水害対策をしていかないといけない。6校

へのアンケート調査を行った結果、地域と連携した防災活動を行う必要があることが分かった。そこで、近隣市町から通学している生徒へも配慮をし、鉄道会社と協力していく必要があると考えた。また、地域と学校をつなぐ存在を、大学も使って新たに立ち上げる必要を提言した。

### 子ども食堂の存在意義と可能性～学生が運営する子ども食堂を中心に～

小林 拓真 | 地域経営学科 4回生 明誠学院高等学校(岡山県)出身

本論文では、まず第1章で子どもを取り巻く問題の現状を整理し、子ども食堂の存在意義の変遷について考察した。第2章で学生が運営する子ども食堂を概観した上で、続く3章でふくちやま子ども

食堂の実践事例を考察した。そして、第4章において今後の展望として学生が運営する子ども食堂の可能性について論じた。

### 我が国における教育格差問題は正に向けた取り組み ～京都北部における学習の機会確保に向けた学校外教育の在り方～

田中 友季也 | 地域経営学科 4回生 米子高等学校(鳥取県)出身

本論文では、第1章で現状分析を行い、子どもの貧困率や所得と学力の関係、居住地と学力の関係などについて考察した。第2章では本研究での調査対象である京都府に標準を絞り、京都府内での教育

格差、経済格差などについて検討した。第3章では先行事例として教育格差について取り組んでいる組織などについて取り上げた。第4章では教育格差是正に向けた提案を行った。



### 都農複合型都市における高齢ドライバー現状と交通事故防止策 ～京都府福知山市を事例として～

東 佑多朗 | 地域経営学科 4回生 金沢錦丘高等学校(石川県)出身

本論文では、第1章で運転免許の自主返納に必要な環境づくりについての先行研究は2つの分類に分けることができ、既存の研究は都市か農村のどちらかに偏った研究が多いということを示した。第2章では京都府警察本部交通部『高齢運転者交通事故防止対策』～みんなで作ろう！京都の交通安全～から免許返納をしてい

きたいが、免許返納後の交通手段に心配があり、免許返納ができるような環境が整っていないことを指摘した。第3章では京都府京丹後市丹後町のささえあい交通く気張る！ふるさと丹後町>と兵庫県養父市のやぶくるの事例を紹介した。第4章ではUberと200円タクシーを活用したふくくるを提案した。

### 地方の高齢者のQOL向上につながる地域コミュニティの在り方

伊藤 慧祐 | 地域経営学科 4回生 大月短期大学(山梨県)出身

本研究の目的は、今後も数十年単位で高齢社会が続くことが予測される日本において、高齢者が高いQOLを維持していくことができる地域コミュニティにはどのような条件が必要であるのかを明らかにすることにある。

分析するにあたり実施した調査は、文献等を用いた、高齢者の社会的孤立の原因や高齢者のQOL向上・低下させる要因の究明などである。

調査により、高齢者が日常的に高いQOLを満たすためには「労働」と「交流」の2つの要素を基礎としつつ、地域活性化のアクセントとして「多世代・他地域」という要素を組み合わせることが効果的であるということが分かった。そこで私は、以上の3要素を基に、高齢者に活躍の場を提供できる地域こそが今後の地域コミュニティの在るべき姿であるという結論に至った。

### 文化財保護の現状と対策

清水 康平 | 地域経営学科 4回生 若狭高等学校(福井県)出身

文化財というものの存在意義とそれらを取り巻く現状の問題点である。特に保存をどのようにしていくかが最大の課題だと考えた。そこで、文化財を取り巻く問題をいくつかピックアップし、盗難の問題、少子高齢化による後継者不足、行政の支援に関する問題に注目し調査を行った。

調査の結果、文化財には様々な形がありそれらに対応した保存

方法をとる必要があることと、社会問題である少子高齢化の影響を強くうけており、人が繋いでいく無形文化財の保存が難しい状態にあることがわかった。

「お祭り」のように全世代が一つの文化を共有する行事、イベントの継続と普及が文化財や文化そのものへの敬意につながると考える。

### 海上輸送の史的展開の分析を踏まえた 日系港湾運送事業者の展望

中西 駿介 | 地域経営学科 4回生 大手前高等学校(香川県)出身

本研究では日本港湾の発展と展望を念頭に置き、海上輸送の史的展開そして港湾運送事業者を取り巻く環境や市場構造を分析し、港湾運送事業者の今後の経営戦略展開について考察を行う。またその前提の1つとして、日系コンテナ船社の合併の影響を分析する。

さらにその比較対象として香港、シンガポールなどの海外のメガ港湾運送事業者の動向を観察し、日本の港湾運送事業者との違いの分析を踏まえて今後の課題と将来の展開の方向を述べている。

### 港湾労働者の特殊性とその人的管理について

大崎 聡士 | 地域経営学科 4回生 近畿大学短期大学部(大阪府)出身

本研究では、港湾労働者の特殊性をその歴史的背景や法律的観点を踏まえて理解しつつ、その人的管理について、ヨーロッパのように大規模化し一部非正規雇用を導入すべきなのか、あるいはこれまでのように常用を続けるのかを考察することを目的としている。

この研究を進めるにあたって重要なのは、労働者を経営的資源として考えることである。それにあたって労働者に関する法律や港湾労働者の歴史について調べ、それを踏まえ今後の港湾労働の変化を踏まえた人的資源管理の方向を考察している。

### マテリアルハンドリングの導入による物流センターの将来的な運営方法の考察

小林 計介 | 地域経営学科 4回生 島田樟誠高等学校(静岡県)出身

本研究では日本国内の物流業界の歴史を紐解き、物流業界がどのようにして進化を遂げてきたのか、その歴史の中で見えてくる進化の方向性を考察することとし、今後の物流倉庫及びシステムはど

のように変化していくのかを考える。特にマテリアルハンドリングの最新技術を概観しながら、将来的な物流センターの管理手法のあり方を模索している。

### 物流におけるEC(電子商取引)の影響とその対策案

三浦 祐悟 | 地域経営学科 4回生 函館高等学校(北海道)出身

最近の人々の購買活動は実際の店舗を通してではなく、インターネットを通じて行われるようになってきている。この購買活動は現在ECと呼ばれ、ECサイトの利用度はますます高まっている。しかしながら、その影響として宅配便の物量が増加し、倉庫や道路運送におい

て人手不足などの問題を起こしているという事情がある。これらの問題がどこにあり、どのようにすればこの問題を解決することが出来るのかという観点から、特にドローン輸送の可能性を考察している。



### 地域に必要な医療とは —愛媛県愛南町における医療機関の今後のあり方—

寺本 義洋 | 医療福祉経営学科 4回生 南宇和高等学校(愛知県)出身

本研究では、筆者の故郷である愛媛県愛南町(以下、A町)に焦点を当てた。地域医療構想においてA町にあるM病院が再編・統合の検討対象とされ、地域住民がショックを受けたことを受け、研究対象とした。同町のM病院、およびA町における地域医療について、公表されているDPCデータ、施設基準データ、病床機能報告データなどを用いた分析を行い、当該地域における医療機関が現在如何なる役割を果たしているのかを検証した。

結果として、M病院があるA町は今後も少子高齢化が進み、急性期の病院以上に慢性期の病院が必要となることが明らかになった。A町では一本松病院のみが慢性期の病床を60床有している。人口が約2万人、高齢化率が40%であれば、単純計算で8,000人の高齢者がこの地域に存在するため、今後この地域では慢性期病床が不足する可能性がある。これを解決するため、M病院で現在休床中の55床を慢性期病床に転換するという方策を提案した。

### 滋賀県における病院の現状とは —地域に必要な病院とは何か?その存在意義を探る—

中西 優介 | 医療福祉経営学科 4回生 比叡山高等学校(滋賀県)出身

本論文は、地域医療構想ワーキンググループ(以下、WG)に再編・統合の検討が必要と指摘された医療機関のうち、筆者の出身地である滋賀県に焦点を絞り、「WGの指摘は正しいのか?」という疑問を晴らすとともに、被指摘病院が地域医療において果たす機能・役割について、入手可能な公開データを分析することで明らかにすることを目的とした。WGによる要検討病院リストでは、滋賀県において5病院が挙げられ、そのうち守山市民病院(M病院)は筆者にとって身近な医療機関である。そこでM病院と近隣の済生会滋賀県病院(S

病院)を対象を絞り、病床機能報告、施設基準など他の公開データに基づいて地域における機能や役割の相違を調査した。

結果、M病院は地域の高齢者や長期療養者を受け入れる重要な慢性期機能を有すが、今回のリストではその評価がなく、そのため被指摘病院となったことが推測された。M病院とS病院は後に同法人の経営となったが、急性期から慢性期への医療連携と、地域における患者受け入れ機能のバランスを取ることが可能となった点で今後に期待できるものとする。

### 南勢志摩医療圏において公的医療機関はどのような役割を果たしているか —圏内の基幹病院等6病院を例に挙げて—

中村 遼 | 医療福祉経営学科 4回生 宇治山田高等学校(三重県)出身

本論文では、筆者の出身地である三重県の南勢志摩医療圏、および松坂構想区域に点在する医療機関それぞれの地域医療における存在意義について検討した。特に論文執筆中の9月26日に公開された地域医療構想に関するワーキンググループ(以下、WG)による統合・再編の再検証要請の病院リストは、筆者の研究内容に関わりの深い内容であり検討を必要とした。そこで病床機能報告や施設基準データなど公表データや病院Webサイトの公開情報を元に各病院の機能やリストの適切性について分析を行った。

結果として、WGのリストはがん医療・救急医療など限られた機能の実績データに基づいているため、急性期機能を持ちながらも回復期機能に重点を置く病院が、実績が乏しい＝統合再編が必要とされていることが分かった。また松坂構想地域では、地域の病院間で密な協議が行われ、機能分化の推進と地域医療体制の整備が行われており、病院間のバランスが図られていることも分かった。

### 地域医療構想実現には何が必要か 東京都区中央部の現状と地域医療構想に関するワーキンググループの指摘から

畑山 暁 | 医療福祉経営学科 4回生 道守高等学校(福井県)出身

本論文では人口約86万人の特別区である東京都区中央部を研究対象として、地域医療構想ワーキンググループ(以下、WG)による再検証要請の対象医療機関(3病院)の指摘が正しいかについての検証を行った。検証には各病院が公表しているDPCデータ、施設基準データ、病床機能報告データなどを用いた。

分析の結果、再検証要請対象とされた病院は、整形外科など特定の診療科目や回復期・慢性期医療など他の医療機関にはない独自の機能で地域に貢献していることが明らかとなった。東京都区中央

部のように特徴のある地域においては、当該WGのデータを活用することは難しく、また病院の特徴が勘案されていないため、専門特化した病院や、急性期機能以上に回復期・慢性期機能に注力する医療機関は、地域にとって必要であるにも関わらず、再検証要請対象機関となっていることが分かった。病院の特徴から、地域において必要とされていない病院は少ない。その地域に合わせて、病床の削減や機能を変えていく必要があるものとする。

### 泉州二次医療圏において公立・公的医療機関が果たしている役割とは —公設民営のA病院を例に挙げて—

堀江 悠太 | 医療福祉経営学科 4回生 福知山高等学校(京都府)出身

本論文における研究対象は、主に筆者が次年度より就職するA病院とした。筆者は、A病院の泉州医療圏における位置づけ、機能、役割について研究を行っていた。そのさなか、地域医療構想WGによる統合再編の要検討病院リストが公表され、A病院が要検討病院のリストに挙げられ、大変衝撃を受けた。自らが就職する病院が再検証の対象となった不安感以上に、A病院が本当の意味で如何なるポイントで見直しが必要なのかを調べてみたいと考えた。そこでA病院を中心に、当該医療圏の5医療機関について、入手可能な

データから比較分析を行った。研究対象の病院において診療実績などを比較したところ、A病院は、当該地域において比較的Stage IVの癌患者、つまり治療不可能であり他の医療機関への引き継ぎが困難な患者が多いため、緩和ケアを担っていることが分かった。またA病院は新築移転後、救急搬送の受け入れ体制や小児医療専用の病棟を整備し、他の医療機関と連携して地域医療に貢献していることが明らかになった。

### 大学生の食生活に関する意識・知識・行動

山本 麗菜 | 医療福祉経営学科 4回生 西宮北高等学校(兵庫県)出身

本研究では、筆者が独り暮らし生活の中、常々考えていた仮説「健康的な食生活は、知識、意識、行動の3つの軸で関係性があり、意識があれば、知識が向上し、行動に影響する」に基づき、それを実証するための調査・分析を行った。調査手法は、Google Formを用いたアンケート調査である。大学教務系の協力を得、対象学生全員(467名)に調査協力の案内を一齐送信した。結果、147名(回収率31.48%、ただし有効回答数125)から回答を得た。アンケートの分析結果から、食に対する意識からだけでなく、知識からでも、行動に

つながっていることが明らかになった。また本学の学生については、知識の平均点が高く、基礎的知識に問題はなかったが、意識に関しては半数が意識していないと回答しており、意識に対する改善や指導が求められるという結果であった。学生は食べることの重要性を改めて認識し、学校側は指導する機会を設けるなど、学生の食生活をサポートする必要がある。今後、学食において、学生に向けた朝食提供の実施など食べる場所と機会を作ることも良いものとする。





## 2019年度 地域協働型実践教育成果報告会

日時：2020年2月15日(土) 場所：福知山公立大学4号館

2020年2月15日(土)、2019年度地域協働型実践教育成果報告会を開催し、学生が一年間の学びの成果を発表しました。1年生はグループごとに15分の発表を行いました。北近畿地域を主なフィールドとして活動したテーマは、由良川屋形船プロジェクトや地域資源のデジタルアーカイブ化、観光とモビリティ、農福連携、農村地域の公共事業、空き施設の活用プロジェクトなど多岐にわたりました。発表後は異なるクラスの学生による代表質問や会場からの質疑応答により、更に理解を深める場となりました。

2・3年生は来場者へのポスターセッション、4年生は卒業研究の口頭発表をそれぞれ行いました。一年間の学びの集大成を見ようと、当日は地域の方々にも多数お越しいたご、学生たちの発表にも熱が入っていました。



## 1年生「地域経営演習」の発表スケジュール

	101講義室	102講義室	103講義室	ポスター発表
10:30	挨拶等	挨拶等	挨拶等	
10:35	Aクラス①(井上・張) 「由良川屋形船プロジェクトの調査」	Fクラス②(山田・佐藤充) 「大江と由良川」	Dクラス②(谷口・加藤) 「地域社会への理解を深める協働実践 ～大正地区公民まつりを通して」	
11:00	Bクラス①(矢口・中尾) 「三和ってよくない？ ～農業の未来を考える～」	Gクラス③(神谷・江上) 「夜久野町における地域資源の デジタルアーカイブ化の取り組み」	Eクラス③(鄭・杉岡) 「六人部PA利用向上に向けた取り組みについて ～売上向上に向けた提案～」	
11:25	Cクラス①(芦田・垣内) 「地域とともに学ぶ防災」	Aクラス②(井上・張) 「由良川屋形船プロジェクトの 乗船料設定」	Fクラス③(山田・佐藤充) 「大江町の観光とモビリティ」	
11:50	昼休憩			
12:50	ポスターセッション(3階セミナー室・4階会議室へ)			
13:50	後半挨拶・準備	後半挨拶・準備	後半挨拶・準備	ポスター セッション 12:50～ 14:20
14:00	Dクラス①(谷口・加藤) 「ラジオ番組の制作・出演による ディレクション・口頭表現の能力向上」	Bクラス②(矢口・中尾) 「交流とは？ ～三和町で学んだ5つのこと～」	Gクラス③(神谷・江上) 「夜久野町における観光資源の保存と広報について -Wikipedia Townの取り組みを通して-」	
14:25	Eクラス①(鄭・杉岡) 「魅力的な福知山土産って何だろう？」	Cクラス②(芦田・垣内) 「北近畿の農福連携について」	Aクラス③(井上・張) 「由良川屋形船プロジェクトの広報」	
14:50	Fクラス①(山田・佐藤充) 「大江町の買い物動向について」	Eクラス②(鄭・杉岡) 「JR西日本福知山駅地域共生スペース 活用プロジェクト ぼっぼがかり活動報告」	Bクラス③(矢口・中尾) 「三和町及び農村地域の公共事業」	
15:15	Gクラス①(神谷・江上) 「夜久野町における地域資源の デジタルアーカイブ」	待機	待機	
15:40	待機	101へ移動	101へ移動	
15:45	全体講評			
15:55	終了			

## ポスター等によるゼミ発表一覧

学年	担当教員	テーマ	教室
3	大谷	・多文化共生のまちづくりの検討～日本人と外国人がともに暮らす地域のあり方～	301
3	渋谷	・外国人労働者のいる社会:より良い共生社会を目指して	
3	鄭	・経営を工学的な視点から考える	
3	加藤	・ECサイトの成長要因	302
3	中尾	・成熟市場での企業の回復要因	
3	中尾	・多自然圏の地域活性化に関する研究	303
3	矢口	・富山県における農業構造の現状と今後の展望～小矢部市下中(しもなか)第三集落を事例として～ ・由良川オーブンを軸とした地域の活性化～人と人・人と地域・地域と地域という3つの視点からのアプローチ～ ・大原野開発生産組合におけるぶどう経営現状と展望	
3	谷口	・銭湯経営の現状と観光資源に関する研究と実践～福知山市唯一の銭湯「櫻湯」での試みを通して～ ・「進学移住」学生の地域関心度向上を目的とした居住に関する総合情報プラットフォーム事業について ・商店街の空き店舗を活用したアート活動による地域交流の展開 ・地域の祭りによる効果の研究・実践	
4	杉岡	・ゼミ生それぞれの卒業論文紹介	304
3	杉岡	・1人1プロジェクトリーダー制から学ぶ臨床政策ゼミ	
2	杉岡	・観光マーケティング、サードブレイス、関係人口から考える臨床政策ゼミ	
3	神谷	・AIを用いた地域情報の分析～福知山市～京丹波町間の観光者行動～	305
3	張	・アートプロジェクトによる地域活性化～日中農村比較から～ ・クルーズ船寄港地商店街住民の異文化受容意識の規定要因に関する実証分析 ・災害発生時における外国人居住者に向けての情報伝達に関する研究 ・日本企業のアフリカ進出を中国企業のアフリカ進出と比較した研究～豊田通商を例にとり～ ・キャッシュレスにおける日中両国の農業地域住民の意識比較	
3	三好	・市町村産業連関表から見る地域産業構造の特徴～京都府26自治体の作成事例～	
3	塩見	・すぐれたコンセプトの研究と創造	307
2	塩見	・すぐれたコンセプトの研究と創造	
3	佐藤充	・観光地域づくりを巡る諸問題を考える	308
3	井上	・グローバルに農業で活躍できるまち福知山	
2	井上	・耕作放棄地の再生 ・福知山人口増加の試み ・福知山市の生活を豊かに～スーパーに生活必需品以外の商品を！～	
3	江上	・高等学校における探究学習の方法と課題～地域連携と先端技術を活用した主体的・対話的な深い学びの実践～	4F 会議室
3	垣内	・わが国の乳幼児突然死症候群(SIDS)の疫学とその正確な実態把握について	
2	垣内	・京都府北部における農福連携の現状について	
3	星	・北近畿地域において医療・介護資源は足りているのか ・地域の公的医療機関が存在する意義とは？ ・病院実習を経験して何を学ぶことができたのか？	
3	岡本	・データウェアハウス(DWH)ゼミ	
3	社会調査	・社会調査演習(学生生活実態調査)	

## 4年生「卒業研究」発表

	402教室	403教室
14:30	篠原ゼミ① 三浦祐悟(4年)	佐藤恵ゼミ 「地域経営演習IV」(2年)、 「地域経営研究」(3年)
14:45	「物流におけるEC (電子商取引)の影響と その対策案」	「福知山市在住の前期高齢者の 健康意識に関する調査について」
14:45	篠原ゼミ② 小林計介(4年)	星ゼミ 山本麗菜(4年)
15:00	「マテリアルハンドリングの 導入による物流センターの 将来的な運営方法の考察」	「大学生における 食生活の意識・知識・行動」
15:00	篠原ゼミ③ 大崎聡士(4年)	
15:15	「港湾労働者の特殊性と その人的管理について」	
15:15	篠原ゼミ④ 中西駿介(4年)	
15:30	「海上輸送の史的展開の 分析を踏まえた日系港湾 運送事業者の展望」	



# 学生プロジェクト

学生が手掛けるプロジェクトは数多く存在し、  
地域と連動したプロジェクトが多いのも魅力です。



## プロの映像作家とコラボレーション。 「福知山イル未来と2019 プロジェクションマッピング」



地域経営学科3年 夏田 康成さん 宮崎県立日向高等学校出身

2年次のゼミで「福知山イル未来と2018」に参加し、学生がプロジェクションマッピングのデザインのアイデアを考え、映像の制作を先生が担当。次年度も同イベントに携わることができればと、私を含むゼミ生3名と学生プロジェクトを立ち上げました。イベントを運営する青年会議所の方々と、本番3カ月間くらい前から週1回程度のペースで打ち合わせを重ね、その中で映像制作を担当するプロの映像作家の方と交流する機会も。「ストーリーのある映像にすると動画と変わらなくなるので、単発物でいいのでたくさんアイデアを出してほしい」など、プロなら

では意見を聞くことができ、視野も広がりました。本番では専用のブースも設営し、インスタ映えを意識した「写真スポットにする」ことをテーマに、ゆらのガーデン内にある店舗の壁などに星や花をモチーフにしたプロジェクトマッピングを実施。当日の会場には多くの地域の方が来場していただき、楽しんでくださっているお客様の反応を身近に見ることができ、大きな喜びを感じられました。



※「福知山イル未来と」  
福知山城周辺と親水公園を幻想的な空間としたイルミネーションで演出するほか、ゆらのガーデンにおける体験ブースなども楽しめる光のイベント

プロジェクトを引き継ぐため、  
技術研究会という  
サークルも立ち上げました！



## 学生プロジェクトとは



学生プロジェクトとは、北近畿地域を中心とした学生の自主的活動について、その企画案を学内で公募し、審査・選定した上で、活動に必要な予算を助成する本学の制度です。

学生が地域の様々な関係者と連携しながら、実際の活動を通して地域課題に目を向け、学びを深めることを目的としています。2019年度では合計15件を採択しました。



## ラジオを通して、地域の人たちと 大学生がつながれるような番組をめざす 「fm学生探偵」オンエア中！



地域経営学科1年 成瀬 花音さん 岐阜県立岐阜商業高等学校出身

綾部市の「FMいかる」さんと隔週で放送しているラジオ番組「FM学生探偵」の制作を行っています。企画や原稿作成、パーソナリティー、ミキシングなどもすべて学生スタッフが担当。「地域の人たちと大学生がつながれるような番組」をめざしており、まずは自分たちのことを知ってもらおうと、今は大学の紹介などを中心に情報を発信しています。同プロジェクトを立ち上げたきっかけは、私がラジオが好きだったから。学生プロジェクトの応募締め切りが毎年4月末で、入学間もない頃、「ラジオ系のプロジェクトをやりたい！」という思いだけを持って申し込みま

した(笑)。友人や先輩に支えられながら企画を少しずつカタチにしていき、10月に「FM学生探偵」をスタート。本当にゼロからだったので、まずは開始できてほっとしました。プロジェクト終了後も学生団体として継続する予定で、今後はまちかどキャンパス吹風舎のラジオ機材を使って放送しようという企画もあり、より「地域の方と密着した」ラジオ番組づくりを手がけていければと思っています。



友だち二人で  
パーソナリティーも担当。  
トークも上達しました！





# 学生プロジェクト概要紹介

## fm学生探偵

目的

「ラジオ」は地域のリリスナーの方々との距離が近く親近感が湧くメディアである。だからこそ大学生ならではの発想力とアイデアを盛り込んだ番組制作を通して地域に話題の種を仕掛け、地域のコミュニティを強化することを目的としている。

内容

私達は綾部市にある「fmいかる」にて毎月第1・3・5土曜日に「探偵のおひるやすみ」というラジオ番組の制作をした。収録にあたり毎回企画会議を行い、各コーナーの内容を全員でアイデアを出しながら考えた。番組では大学自体の特徴や魅力を発信したり、他の学生プロジェクトやサークルの方をゲストとして招いて活動の様子を話した。



## 学生の、“学生による”、学生のための就活手帳

目的

私達の問題意識は、地域経営の担い手である「大学・大学生」と市内を中心に経営活動を行う「企業」とが、ゼロベースから共同で商品開発を行う事例が少ないということであった。そこで、“学生視点”の就活手帳を産学共同で考案した。

内容

プロジェクト会議、企業との打合せを行いながら、“学生視点”の就活手帳の内容、各項目のフォーマットを作成し、製本まで行った。「学生生活に即したカレンダーの書き込み様式」、「面接でされた「困った質問」の紹介コーナー」、「先輩たちの失敗談＆先輩たちの小言」など学生目線で他大学とは異なる独自の就活手帳を作成した。



## ふくちやま多文化交流プロジェクト thinkn

目的

現在、福知山市では約1,000人の外国人が生活しているが、言葉や文化などの違いから地域住民と十分な関係性を築けず、地域で孤立してしまうといった課題がある。そこで、外国人と地域住民、大学生がお互いの文化を理解し、共有できる場を作ること目的に活動を行った。

内容

はじめにイベントの企画や実施などでよりよい活動を行うため、福知山、綾部に住む外国人の方にアンケート調査を実施した。また、2月23日に吹風舎で「世界の遊びを体験しよう」をテーマにイベントを行い、世界の遊び体験を通して地域の子どもたちと交流した。他にも、外国人の方と関わるイベント（「やさしい日本語」講座、多文化交流フェスタなど）に参加し、交流するための勉強や関係づくりを行った。

## 子どもの居場所づくり

目的

近年、主流化した共働き世帯が直面する課題として「子育て問題」がある。UFJ総合研究所(2014)「子育て支援策等に関する調査研究」によると、地域コミュニティとのつながりの希薄さや、子育てにおいて孤立感を抱く家庭の問題が「子育て問題」として取り上げられている。こうした「子育て問題」の負担を軽減することを目的として、「子ども食堂」に着目して活動した。

内容

毎月1回(計12回)の子ども食堂を開催し、大学生と参加した子どもと食事をとったり、持参した宿題を大学生がサポートして取り組んだりしている。勉強が終わった後は、大学生が用意したテーブルゲーム等で遊ぶなどの活動を行っている。他にも、大学祭や駅のクリスマス装飾などのイベントへ参加した。



## 福知山イル未来と2019プロジェクションマッピング

目的

ゼミの活動で取り組んだ「福知山イル未来と2018」におけるプロジェクションマッピングをきっかけに「福知山イル未来と2019」に向けて学生プロジェクトを自主的に立ち上げ、青年会議所の協力のもと、継続して参加することになった。プロジェクトの目的は、プロジェクションマッピングに触れることで技術の学習や機械関連の知識の習得はもちろん、イベント参加を通して地域の方々や青年会議所等の外部団体との交流を深め、地域貢献に寄与することである。

内容

プロジェクションマッピングでは、直接プロの方に指導していただき、アイデアの出し方や機材の取り扱い方を学習した。イベントは9月27日、28日の2日間の実施で、学生ブースを設け、自分たちが考えたアイデアを実際に投影することができた。また、京都府立大学の学生会がごらの協力を得て、イベントまでは学生ブースのアイデア出しや広報活動を共に行った。イベントの広報には、クラウドファンディングを活用した。

## IoT観光者行動分析

目的

海の京都DMOにより設置されたWi-Fiパケットセンサーにより、味夢の里と福知山市の間に無視できない往来が存在することが判明した。パケットセンサーのデータではわからない観光者の行動・目的を、アンケート等の他のデータで明らかにすることを目的とし、自分たちで運用できるシステムを作ることにした。

内容

既存のサービスやテンプレートなどを利用せず、HTML、CSS、JavaScriptで1からアンケートシステムの開発(フルスクラッチ=新規独自開発)をおこなった。そのため、配色、レイアウトなどのデザイン変更、自由記述、位置情報の送信、画像の送信、選択式などの多様な回答方法の設問設定など、柔軟な対応が可能になった。転用も容易なため、API策定のための実証実験などにも利用可能であった。



## キャリアパス0.1

目的

「キャリアパス0.1」の目的は「産官学連携による地域企業の学生間知名度向上」と「学生の就職活動支援」である。本大学において、卒業後に地域へUターンする者は少ない。その要因を「地域で活動する機会が多いが、地域企業を認知する機会が少ない」と仮定し、北近畿一円に事業所を構える企業・行政機関と学生の間に接点の場を設け、学生と地域の双方が恩恵を享受できる新卒採用環境をデザインすることを目的とする。

内容

学生がインターンシップ等に参加する際に指定される「服装自由」の定義について、インターンシップ合同説明会の場で、各企業の人事担当者へ聞き取り調査を行った。その結果をインターン参加時の服装例としてキャリアアドバイザーの添削付きでポスター掲示を行った。また、本学学生を対象とした就活イベントである「グループディスカッション対策講座」及び「学生と人事担当者の交流会」を開催した。



## さくらがわ再発見！プロジェクト

**目的** 近年、桜川市の人口は減少の一途をたどっており、社会動態だけを見ても毎年約300人減少している。この問題を解決するために私達は若者達をターゲットに桜川市の魅力を伝え、彼らの将来に地元へ帰るといった選択肢を与えるためアイデアブックという、自分達のつくったツールを使用して桜川市のUターンを促すことを目的とした。

**内容** 昨年、有志で作成したIDEABOOK(茨城県桜川市に関する16問の問題集)を元に、桜川市役所の協力のもと、ワークショップを開催し、その回答をまとめて作成されたアイデアブック「桜川市職員回答編」を作成した。新人研修で生み出されたアイデアや地元民ならではの気づきを紹介していくための回答集となった。



## 香美町わかもの会議

**目的** 香美町に対して考える場がなかったので、その機会を創出して香美町を考えてみたいと自分自身が思った。ほかの人と対話をしながら考えると、新しい考え方やアイデアが浮かび香美町に対しての関わり方を改める瞬間になるはずと思った。その一つの手段として香美町みらい会議を行いたいと考えた。

**内容** 電話によるミーティングを月1回程度行いプロジェクト内容の確認や現地視察で見たものを共有した。現地視察(2020年1月25日に実施)、協力者の香美町社会福祉協議会とのミーティングを行った。



## 福知山公立大学FAST防災と言わない防災プロジェクト

**目的** 福知山市は、台風による水害など様々な自然災害に見舞われることがある。そこで、市民の防災への意識を高めるために、防災BBQや、防災ゲームDIG等を通して、防災に対する敷居を低くし、私たち自身がまず意識向上に取り組み、市民の人達がより意識をするように手助けすることが目的である。

**内容** さまざまなイベントに参加し、防災意識を高める活動を行った。主な活動として防災BBQの開催(5月)、福知山産業フェア(10月)に参加・発表、庵我ふれあい祭り(10月)に参加、防災キャンプ、京防災フェスタ(11月)に参加・出店した。そして、京都学生FAST活動報告会に参加し、1年間の活動について報告した。



## キッサコウ

**目的** このプロジェクトの目的は、全国で認められる中丹地域のお茶を、もっと多くの方々に知ってもらうこと、興味を持ってもらうこと、また本学の学生に中丹地域のお茶を知ってもらうために大学内で活動した。

**内容** まずは、大学生にターゲットを絞り、学内の試飲会を行った。1回目は煎茶、2回目は玉露、3回目はほうじ茶、4回目は番茶を提供し、各回約40名ほどが参加した。各回に合わせて新聞を作成、アンケートも実施した。また、2月21日に食堂で茶香服というお茶当てゲームの簡易版を行った。昼食時に食堂で行い、8名が参加した。

## 宮津わかもの会議

**目的** 宮津市では、さまざまな要因から人口減少が進んでおり、2045年には1万人を切る予想となっている。そのような課題がある中で宮津わかもの会議は、「若者目線から宮津市の未来について語り合い、未来を実現するための行動を宣言し、行動へとつなげることを目的とする。また、普段あまりない同世代の交流機会、都市部に出ている若者が帰ってくる機会を作る。

**内容** 本プロジェクトでは、2018年度に開催された「第1回宮津わかもの会議」を受け、2019年8月10日に「第2回宮津わかもの会議」を開催し、宮津市長と与謝野町長の首長対談、空き家の有効活用について若者同士で話し合う若者鼎談を行った。2020年2月22日に行った活動報告会では、「宮津AtoZプロジェクト」、「上宮津プロジェクト」、「宮津と謝野交流プロジェクト」の3つのグループが半年間行った活動を報告した。



## 子どもの居場所調査

**目的** 近年、貧困問題、虐待、いじめなど様々な問題を抱え、居場所がない子どもが増えている。この現状を解決するために街中の駄菓子屋など子どもたちの居場所を作ることはできないかと考えた。そこで、まずは子どもたちの居場所の現状を調査するために本プロジェクトを立ち上げた。

**内容** 小学3・4年生に向けたアンケート内容を考える。その内容は普段学校終わりに何をすることが多いか、どこで遊んでいるのかなどを問うものである。また、その保護者向けアンケートも考えた。保護者向けアンケートでは、大学生と交流するイベントを実施する場合のニーズや、何時までに帰ってきてほしいかなどを問う内容にした。



## あさごの時間

**目的** 朝来市では進学や就職による若者の流出や、関係人口の減少が進んでいる。本プロジェクトにおいて朝来市で行われる会議やワークショップに参加することにより、若者の意見を朝来市に取り入れる。また、昨年10月から開催されている「中学生のための学びのサードプレイス」に参加し、中学生の身近な存在となり、新たな居場所づくりに貢献する。

**内容** 11月9日に「あさご未来会議」、11月16日に「朝来市ワークショップ」に参加した。10月から毎週水曜日、中学生のための学びのサードプレイス(山東町)に参加した。12月4日に中学生のための学びのサードプレイス(生野町)の調査をし、現在の課題について、生野町のコーディネーターや地域の方と焚火をしながら語り合った。3月4日・3月11日に大学生主催サードプレイス(山東町)開催予定であったが、コロナウイルスの関係で中止となった。



## ゆら・安寿亭フェス

**目的** 大学生が、宮津市由良地区を拠点に安寿亭の方々と協力しながら地域住民や来訪された方々とのコミュニケーションを取れるような場を作り、コミュニティを広げ深めることを目的とする。また、福知山公立大学の活動などを地域の方に知っていただく機会にする。

**内容** 宮津市由良地区の地域住民の方々と、来訪された方々を対象に大学生が安寿亭の方々と一緒に地産産野菜や特産品を販売することで、認知度の向上に努めた。学生考案の「オリーブオイルを使った摘果みかんクッキー」の販売で、交流を促進するためのプロジェクト企画を実施した。



## 福知山公立大学

### 「地域キャリア実習」プログラムについて

本学では、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会を学生に提供することを目的に、教育課程に「地域キャリア実習」というプログラムを位置づけております。この「地域キャリア実習」では、広く一般に募集を行っている大企業等のインターンシップだけでなく、北近畿を中心とした地域の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な材料を提供したいという意図も含まれています。

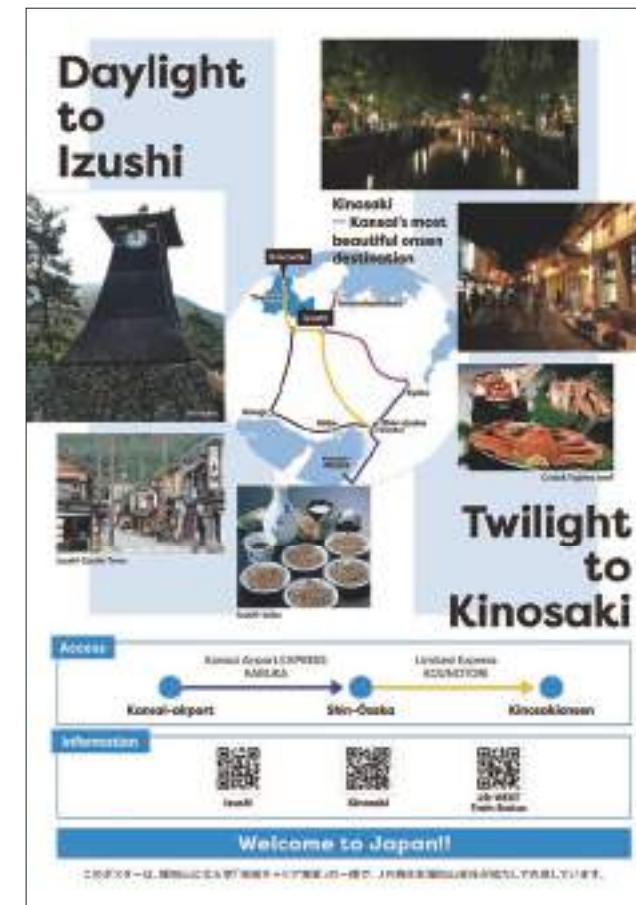
#### 実習までのスケジュール

4月～5月	協力企業への呼び掛け
6月	実習希望学生の募集及び選抜
7月上旬	学生の実習先決定
7月中～下旬	実習先事前訪問(打ち合わせ)
8月～9月	実習(8月中旬～9月末で5日間～10日間)
10月	報告書の作成
11月	学内報告会の実施



## 実習先：西日本旅客鉄道株式会社 福知山支社

地域経営学科 3年 小田恭兵



### 実習内容

- 【1日目】：福知山支社で企業概要や社会人としての心構え等に関する座学  
福知山電車で電気、施設分野の説明・体験
- 【2日目】：福知山電車で整備部門の方から説明・見学  
JR福知山駅で駅業務、設備の説明・体験  
車掌区で車掌、運転士の業務に関する説明・体験、指令室の見学
- 【3日目】：JR西日本全体での地域と連携した活動、鉄道と地域のかかわり方についての紹介・説明  
京都北部と兵庫北部の2グループに分かれ最終日まで通して行うPBL活動に移行、4日目に行う現地調査の場所や行程を決定
- 【4日目】：出石町、城崎温泉、玄武洞公園の三か所を対象とした現地調査
- 【5日目】：4日目の現地調査について「インバウンド観光客への広告デザイン」をテーマとしたPBL活動の最終発表に向けて資料を制作および最終発表

### 実習を終えての学び

実習を終えて学んだことは大きく分けて二つある。一つ目は、自分の生活が多くの人の支えで成り立っていたということである。自分はJR福知山駅をほぼ毎日利用しているが、そこで働く方々と会話をしたことは数えるほどしかなかった。今回の実習で駅の方々に自己紹介をしたとき、「いつも見るよ」と言ってくれたり、駅員の皆さんへの見方が大きく変わった。また、運転、車掌区、指令室といった電車に乗る際に見ることのない分野で働く方と出会い、普段の移動がたくさんの人々の支えで成り立っていることを強く実感した。

二つ目の学びは、社会人としての姿勢である。実習の中で印象的だったことが、どの部門、部署で働く方も「楽しい」や「面白い」といった感情を口にしていたことである。電車区の整備部門の方は「子どもの頃から電車がかったいいと

思っていたからこの仕事についたし、実際に働いていて楽しい。」とおっしゃっていた。5日間通してお世話になった地域連携推進室の方は、「学生の頃は福知山に来てこういう仕事に就くことになるとは思っていなかったけど、やってみると案外面白いし、やってきてよかったと思う。」と口にしていました。

こうした情熱や前向きな気持ちを持って仕事をしている方々に対し、私は「カッコいい」という感情を抱いた。この5日間で多くの知識や経験を得ることができたが、何よりの収穫は「カッコいい」社会人との出会いと、「この人達のように情熱や前向きな気持ちを持って働きたい」という将来のビジョンが一つ見えたことだと考える。



## 実習先：井上株式会社

地域経営学科 3年 高田悠太



### 実習内容

- 【1日目】：井上大輔社長の講義を聴講、社長のもと職業観などを習う。協力することの大切さを学ぶグループワーク
- 【2日目】：新しく設置するカメラの設定、井上株式会社が携わった福知山市内の浄水場システムの見学
- 【3日目】：新たに設置する農地の設営、土入れ
- 【4日目】：活動報告書作成、5日目に行うプレゼンテーションの練習
- 【5日目】：お世話になった方を交えた食事会のための準備、食事会、プレゼンテーション



### 実習を終えての学び

1日目の社長の講義で、「何のために働くのか」を質問された時、私は、「お金や自分のためかなあ」と漠然としたことを考えていた。しかし、就活を目前に控え、会社選びをするにあたり、このままではダメだと思い、このインターンシップ期間中に「自分なりの職業観を持つ」という目標をもって体験に臨んだ。インターンシップ中は驚かされることが非常に多かった。家電や車と違って水道のシステムなどは目に見えてない場所で役に立っていて、福知山を下から支える基盤となっている企業なのだ気づいた。そして最終的に、「自分なりの職業観」を得ることができた。それは『自分に(間接的にも直接的にも)関わりのある全ての人のために働く』という職業観である。なぜそうなったのかというと、3日目にお世話になった森さんが車内の中で会話した際に「自分のために働く」と絶対にエゴがでてきてしまうとおっしゃっていたからだ。インターンシップ当初の自分の職業観は間違っていたと気づいた。きっとエゴが発生してしまうと、仕事に大切なコミュニケーションに支障が生まれてしまうのだと

思った。得た職業観を常に持ち続けて生きていきたい。

体験を通して、私の中にある会社に対するイメージも急激に変化した。井上株式会社は、労働環境作り非常に力を入れていた。社内SNSの完備、残業しない日を毎週設けるなど、「働きやすい職場」を目指していたと思う。会社選択をするにあたり何が重要なのか一つの正解を得た気がする。

最終日のプレゼンテーションの中で、社長がおっしゃっていた、「自分がやりたいことを後押ししてくれる会社に入社してほしい」という言葉は私の中に深く刻まれた。実際、井上株式会社は、事業に対し提案する場を作っていて、自分のやりたいことを後押ししてくれる企業だった。これからの就職活動に対し、給料だけではなく、社員一人一人に対し、親身になってくれるような企業に就職しようと強く思うようになった。自分の進路に対し今一度考え、向き合っていきたい。

## 実習先：舞鶴市役所

地域経営学科 3年 内田舞



### 実習内容

- 【1日目】：午前中は企画政策課にてインターンシップのスケジュール確認と舞鶴市の概要説明。午後は舞鶴市の課題解決に向けた取り組みの提案
- 【2日目】：市長公室危機管理防災課にて原子力防災概要説明と原子力防災図上訓練の見学
- 【3日目】：午前中に危機管理防災課とSDG'sの取り組みの概要説明、舞鶴市浸水被害についての説明。午後は防災関連施設等の視察
- 【4日目】：市民防災力の向上について、防災学習資料等の説明。小学生向け防災資料の作成
- 【5日目】：HUG(避難所運営ゲーム)の体験

### 実習を終えての学び

舞鶴市役所のインターンシップでは、企画政策課と危機管理防災課の二つの課を体験させていただいた。企画政策課では課の名前から、日夜新たな政策の作成や今までの政策についての修正等が行われていると思っていたが、実際には会議の日程調整やアポイント取りが主な業務であった。危機管理防災課では初日から原子力防災図上訓練を体験させていただいた。図上訓練では、もしもの時には市民がどうしたら安全に避難できるか、どういった方法がより混乱を回避させることができるだろうかと、様々な不測の事態を想定し進められていた。図上訓練や防災施設等の見学をすることで、市民の日々の安全を守るため、地域のために働く行政のありがたさを肌で感じる事ができた。

また、実習の中で特に印象に残ったのは、HUG(避難所運営ゲーム)である。HUGは、避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカード

を、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームである。実際にHUGを行ってみると、それぞれの抱える事情や出来事に対応していくことの難しさを学ぶことができ、何を優先させるべきなのかといったことを考えさせられた。HUGを通して、こうした災害時への備えを行うことが市民を支え、市民として支えられる上でも大切なことであると感じた。

この実習に参加したことで、これまで漠然としたイメージであった市役所での仕事について触れることが出来た。地域のために働くということは何かということを実際に見ることができ、地域社会との関係を学んでいる身として今回の実習で得た学びを生かしていきたい。



●実習病院を決める●

実習でお世話になる病院は、以下の流れで決まります。

- ① 実習を受けたい病院の候補を探す。  
(学生) ※2回生2~3月
- ② 病院に依頼状(予告)を送付する。  
(大学) ※2回生3月
- ③ 病院に連絡を入れ、実習の受け入れを依頼する。(学生)  
※3回生4~5月
- ④ 実習病院が決まる。 ※3回生6月  
・依頼状、協定書  
・自己紹介書 の送付・持参
- ⑤ 実習病院の事前調査・研究を行う。  
(学生) ※3回生6~7月
- ⑥ 実習病院に事前挨拶に行く。  
(学生・大学) ※3回生7~8月

が、病院さんにも様々な都合があり、希望が必ず叶うとは限りません。その場合は、先生と相談しつつ実習病院を決めることとなります。

二〇一九年度病院実習

●病院実習を行う理由●

診療情報管理士認定試験の受験資格を取得するには、3年次前期までに、以下の全科目の単位を修得し、さらに、病院実習に赴く必要があります。

- <1年次>
- 解剖生理学
  - 医学英語
  - 医療概論
  - 感染症・呼吸器学
  - 血液内分泌・腫瘍学
- <2年次>
- 精神神経・循環器学
  - 消化器・泌尿器学
  - 医療管理論Ⅰ
  - 医療情報学
  - 診療情報管理論
  - 周産期・先天異常学
  - 皮膚筋骨格・中毒学
  - 医療管理論Ⅱ
  - 医療統計学
  - 診療情報分類法総論
- <3年次>
- 医療管理論Ⅲ
  - 診療情報分類法演習
  - 診療情報管理実習 (夏休み中)

実習病院について (事前調査の結果)

実習病院が決まった後に行うのが事前調査です。実習に赴く前に、お世話になる病院のことを調査し概要を把握しておくことは、重要かつ当然のことです。以下は調査内容をまとめた表です。

実習先病院	所在地域	病床数 <sup>※1</sup>	区分	診療録管理 体制加算	診療録管理 専従者数	平均 在院日数	年間退院患者 数(推計) <sup>※2</sup>
病院01	関東	一般:432、感染症:10	準公	1	1名	11.8	7,625
病院02	関東	一般:527、精神:22、感染症:6	準公	1	10名	10.9	16,613
病院03	関東	一般:343	民	2	5名	10.8	10,139
病院04	北信越	一般:263	準公	2	1名	18.8	3,844
病院05	北信越	一般:318	準公	2	2名	10.1	9,942
病院06	東海	一般:382	公	2	1名	14.0	7,509
病院07	東海	一般:284	民	2	3名	14.0	6,388
病院08	東海	一般:527	民	2	1名	11.0	14,865
病院09	東海	一般:200	公	1	2名	16.6	3,382
病院10	東海	一般:577、精神:37	公	1	8名	11.7	15,910
病院11	北陸	一般:275、精神:30	公	1	6名	12.3	7,739
病院12	北陸	一般:300	公	1	4名	16.0	6,114
病院13	北陸	一般:586、感染症:4、結核:10	準公	1	7名	12.1	14,009
病院14	近畿	一般:171	民	2	1名	21.0	2,565
病院15	近畿	一般:340、感染症:4、結核:10	公	2	1名	14.3	8,160
病院16	近畿	一般:300	公	2	1名	11.2	7,267
病院17	近畿	一般:333	民	1	3名	13.2	8,074
病院18	近畿	一般:554、感染症:6	準公	2	5名	10.0	17,593
病院19	近畿	一般:865、感染症:8	準公	1	11名	10.9	20,594
病院20	中国	一般:340	公	1	2名	13.7	6,783
病院21	中国	一般:361、感染症:4	公	1	3名	15.4	6,779

※1 公…国・都道府県・市町村立病院、準公…赤十字など公的性質の病院、民…医療法人など民間病院  
 ※2 平均在院日数と病床利用率から推計  
 ※上の表は、病院のWebサイト、都道府県別の医療機能情報提供サイト、および公表されている施設基準情報から作成したものであり、最新の情報でない場合もありますので、ご了承ください。

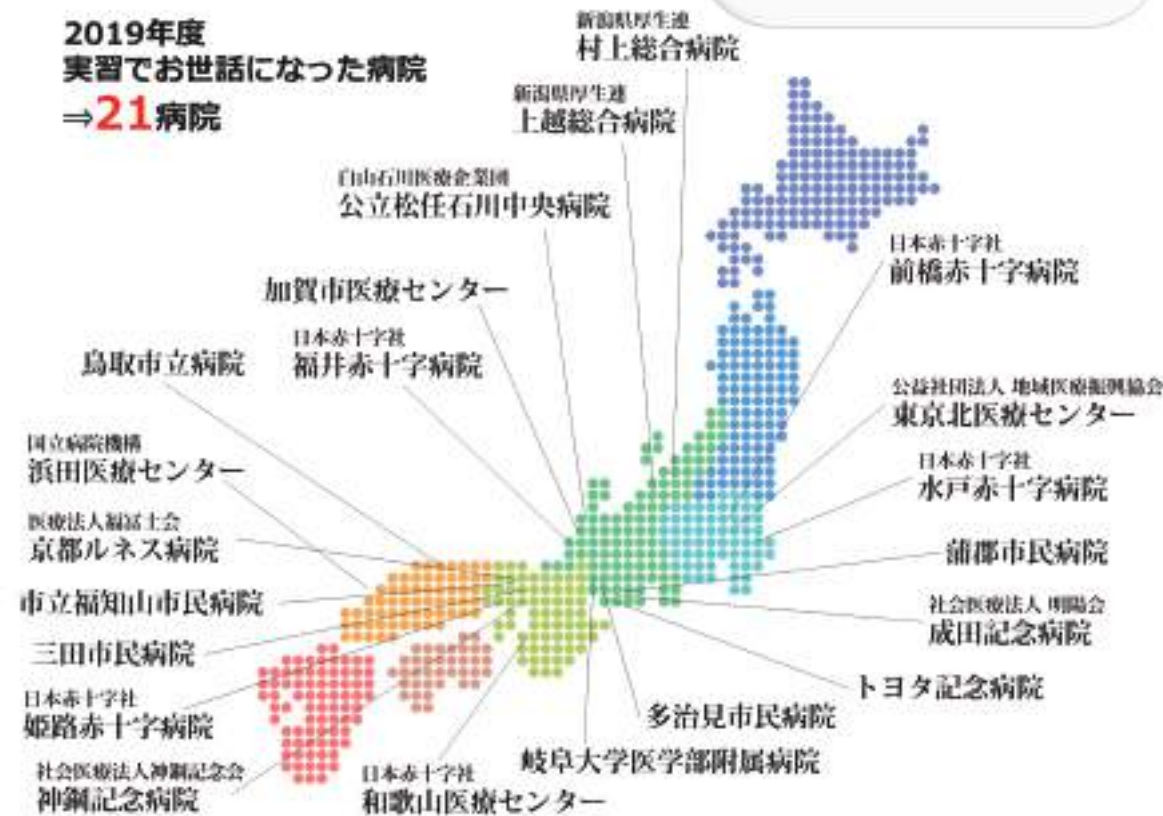
診療録管理体制加算

加算とは、病院がある要件(基準)を満たすことにより、プラスの診療報酬を受け取ることができるというものです。  
 診療情報管理士を基準の人数配置し、さらに他の要件をクリアすることによって、入院患者1名につき以下の報酬がプラスされます。  
 診療録管理体制加算1 100点  
 診療録管理体制加算2 30点  
 (1点:10円)  
 この加算1の重要な要件の一つに、年間退院患者数2,000名ごとに1名以上の専任の常勤診療記録管理者が配置されていること(うち1名は専従であること)というものがあります。  
 参考までに、上の表の「診療録管理専従者数」は、「医療機能情報提供制度」において都道府県に提出が義務付けられている情報です。  
 要は、「診療録管理体制加算1」を病院が取得しようと思えば、少なくとも1名は「診療録管理専従者」が必要だということです。

病院実習で経験させていただいたこと

- 診療情報管理士の業務 (ICDコーディング、DPCコーディング、がん登録、NCD登録、退院サマリー点検など) について、実際の作業を通じて学ぶ。(診療情報管理室)
- 複数の事務関連部署をまわり、作業 (新患登録、受付、退院処理、紙カルテの出納、レセプト点検、クラーク業務など) を行うことで、様々な事務職が何のためにどのように機能しているかを学ぶ。(総合案内、受付、病棟、入退院支援 など)
- 電子カルテでも「紙モノ(副カルテ)」が存在し、管理が必要であることを知る。(診療情報管理室、カルテ庫)
- 病院経営に関係するデータの分析・院内発表を経験できることもある。(総務室、経営企画室)

2019年度  
実習でお世話になった病院  
⇒21病院





LINKtopos 2019 in 高知



LINKtopos(全国公立大学学生大会)は、東日本大震災に際して全国の公立大学で展開された被災地支援活動をきっかけに、全国の公立大学の学生をつなぐ場として発足した。2013年の第1回大会を皮切りに、その後年に1回、全国各地で開催されている。



第7回大会の今年度は、9月3～5日、全国から106名の学生と26名の大学教職員が集い、県立幡多青少年の家(高知県黒潮町)で行われた。本学からは、まちかどキャンパス吹風舎学生企画チーム「DOKKO」のメンバー6名と教員1名が参加した。

初日はアイスブレイク、夕食後に学生団体の活動紹介のポスターセッションが開催され、大学を超えた活発な議論や情報交換が行われた。2日目は防災先進自治体・黒潮町のフィールドワーク、および防災事例を参考にしたワークショップに取り組んだ。3日目は2日目のワークショップの成果報告が行われた。また地区別LINKtoposが初開催され、近畿ブロックなど大学の所在地区別に今後の活動について話し合った。全国から集った公立大学生同士の交流と学びに加え、教職員によるHUG(避難所運営ゲーム)が組み込まれ、学生のみならず教職員も充実した時間を過ごした。



この大会は、他大学との交流機会が乏しい本学学生・教職員にとって、視野を広げ他大学とのネットワークを形成する良い機会となった。

なお次年度は、本学学生2名がLINKtoposの運営チームとして活動を行う。

京都から発信する政策交流大会

「第15回京都から発信する政策研究交流大会」  
(主催:公益財団法人大学コンソーシアム京都)



2019年12月15日(日)に京都市内で開催され、地域経営研究II(谷口教授)の学生が応募した福知山商工会議所と協働するプロジェクト「『進学移住』学生の地域関心度向上を目的とした居住に関する総合情報プラットフォーム事業」が優秀賞を受賞した。

本プロジェクトは、本学への入学を機に福知山で下宿しようとする入学前の高校生と、すでに下宿している在学学生をあわせて「進学移住」学生と定義し、それらの学生への地域の関心度を向上させ福知山での学生生活をより豊かにするために、学生や商工会議所等が連携して情報のプラットフォームを形成するというものである。福知山商工会議所の一階部分にある空き店舗を活用し、学生同士や企業との交流スペースとして地域の情報交換や交流を行うなどの具体案も提示された。



2020年1月24日(金)に福知山商工会議所において、受賞報告会が開催された。出席者からは、「情報発信の必要性は随分前から言われているが、継続が難しい。持続可能な仕組みを考えてほしい」「卒業後もこの地域に定住してもらうために、より一層の情報発信が必要」といった意見が挙がった。

学生部会「かごら」と本学3つの学生団体の交流



京都府立大学の地域貢献活動団体である京都地域未来創造センター学生部会「かごら」と本学の学生が交流をした。

3年目となる学生部会「かごら」との交流、今年は本学の3つの学生団体と意見交換会を行った。お互いの活動を共有した後、地域住民との関わり方や広報、ミーティングの行い方などについて意見を出し合った。

まず、9月20日、福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎学生企画チーム「DOKKO」との交流を行った。

続いて、福知山公立大学プロジェクトマッピングチーム(FUPM)と9月21日に開催された「福知山イル未来と2019」において、2大学で連携してプロジェクトマッピングを行った。

最後に、9月26日、学生プロジェクト「子供の居場所づくり」が企画した第6回ふくちやま子ども食堂に参加し、子どもたちを含めた交流を行った。

他大学の学生と福知山で語ることができる貴重な機会となった。



名桜大学との交流

他大学との交流を通して新たな発見と知識を。  
名桜大学(沖縄県)との交流 第2弾



名桜大学は、本学と同様、診療情報管理士認定試験指定校(国公立大学は2校)である。わが国における数少ない病院事務職養成を行う公立大学同士として、本学と名桜大学は今後も協力関係を続ける必要がある。

星ゼミは、昨年度に引き続き、2019年10月21～24日の沖縄研修において、名桜大学国際経営学群診療情報管理専攻の専門・大城ゼミとの研究交流会を行った。当ゼミ生と名桜大学3年生との親睦会を行った後、診療情報管理士による診療情報提供の場面を想定したワークショップを実施した。ワークショップの場面想定は、患者本人(17歳)・患者家族(父親)に対して、医師と診療情報管理士が診療情報を提供するケースであった。大城ゼミが設定したシナリオに基づき、学生がそれぞれの役を務めた。役者となった学生以外はセリフや行動を観察しながら、医学・医療の素人である患者・患者家族に対し、診療情報提供を行う際に必要なポイントについて話し合い、結果を大学混合グループでまとめ、発表を行った。

なお、本研修では、本学2期卒業生(玉那覇氏)が診療情報管理士として勤務する中部徳洲会病院の見学、および現場事務職者との会談も実施した。大都市である那覇市から50キロ以上離れた沖縄県中部エリアの「地域医療」を一手に担う当該医療機関について、実地で学ぶ機会が得られた点でも、昨年度と同様、本研修の意義があったものと考えられる。





京都の新しい公立大学



福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部 地域経営学科/医療福祉経営学科  
情報学部 情報学科(2020年4月開設)

---

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370  
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170  
<http://www.fukuchiyama.ac.jp>

